みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Japanese as a mixed language : sound law and semantic change from Proto Austronesian to Ancient Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003865

国立民族学博物館研究報告36(3): 353-393 (2012)

日本語の混合的特徴
──オーストロネシア祖語から古代日本語へ音法則と意味変化──

崎　山　　理*

Japanese as a mixed language: sound law and semantic change from Proto Austronesian to Ancient Japanese

Osamu Sakiyama

日本語は，北方のツングース諸語および南方のオーストロネシア語族の両文法要素を継承する混合言語である。日本語の系統もこの視点から見直そうとする動きがすでに始まっている。これまでに発表したいくつかの拙稿では日本語におけるオーストロネシア系語源の結論部分だけを述べたものが多かったが，本稿では音法則を中心とした記述に重点を置き，意味変化についても民俗知識に基づいた説明を行った。引用語例は筆者がすでに述べたものも含まれるが，多くは本稿で初めて提示するものである。他者によって言及されている語源説についてはその妥当性を検討した。また，論述の過程において，日本語音韻史でこれまで隔靴掻痒の感が否めなかったハ行・ワ行歴史的仮名遣いの表記上の問題点を摘出した。

That Japanese was formed through a mixture of Tungusic and Austronesian has gradually become clear. While it is said to be difficult to locate Japanese in a particular language family, this may be primarily because of the great length of time over which present-day Japanese was formed. Progress has been hampered by insistence on the “purity” of the language. Modern Japanese was in fact formed through a mixing of languages.

After Austronesian first moved from Taiwan into the northern Philippines around B.C. 2500, including the Malayo-Polynesian subfamily, a branch of this group left for the Ryukyu-Japanese Archipelago and first settled in West Japan in the late Jomon period. As people spread northeastward, rice might

*国立民族学博物館名誉教授

Key Words：Proto Malayo-Polynesian, Japanese genealogy, language contact, confusion of labials, rice-related terms

キーワード：マライ・ポリネシア祖語，日本語系統，言語接触，ハ行転呼音，イネ関連語彙

have carried with them, as evidenced by the early presence of rice cultivation in the southern Taiwan and the northern Philippines around B.C. 2000. Several Austronesian rice-related terms are retained in Japanese while involving semantic changes; for example, Proto Malayo-Polynesian (PMP) **bəRas* 'husked rice' became Ancient Japanese (AJ) **fiya-i* (Old Japanese (OJ) *hiyë* 'Japanese millet'), PMP **pajay* 'rice plant' to AJ **fasai* (OJ *hasë/wasë* 'early-ripening rice plant'), and so on.

In this paper I focused my concern to show about a hundred cognate words based on regular sound correspondences between Proto Austronesian (PAN) or PMP and AJ, earlier Japanese before the Nara period (A.D. 710-784), and also to explain semantic changes brought about in AJ from the viewpoint of ethnology. In the case of sound changes from PAN to AJ, the most remarkable is the confusion of phonetically similar phonemes : the distinction between *f /ɸ (the present *ha* column in *kana*) and *w (the present *wa* column), inherited from PAN *p/*b and *w respectively, is suspected of having become disordered mainly in the intervocalic position of AJ and that this confusion carried over into the OJ Man'yo-gana writing system (Japanese syllabaries originated from Chinese characters) used since much earlier in the Nara period. Some words written with the *ha* column were rewritten with the *wa* colomn, and vice versa sporadically, to which I pointed out the historically logical etyma tracing back to Austronesian. Another case is the merger of etymologically different phonemes; PAN *R and Proto Tungusic *d seem to have chanced to become one phoneme *y* in AJ. As characteristics of sound change PAN word-final consonants tend to be dropped in AJ, allowing stems to end with an open syllable. This trend, i.e. apocope, appears as a common phenomenon in Malagasy and Oceanic languages (particularly Polynesian languages), which are found on the geographical rim of the Austronesian distribution. And as a noticeable sound change from PAN the distinction between voiced and voiceless consonants is being lost, and in most languages of Oceania as well as in AJ, this tendency is argued to exist on reliable linguistic evidence. It would not be surprising even if a similar drift has emerged in Austronesian, which extended to Japan's northernmost tip. The reason why the phonological voiced and voiceless distinction revived at the latest before the Nara period is inexplicable without taking into consideration on language contact and bilingual mixtures brought about in the process of forming the Japanese language after the late Jomon period. I wonder how conservative thought attached to language monogenesis interprets this extraordinary innovation.

The pitch accent of Japanese is an important element when considering the origins of the Japanese language. In Austronesian languages roots are basically multisyllabic. I divide AJ vocabularies etymologically originating in PAN/PMP into three groups : group 1 appears to inherit the penultimate syllable of PAN, group 2 the final, and group 3 reflects the whole form. It is interesting that Poi Tsaan (Huihui-hua), a Malayo-Polynesian Chamic language

of Hainan Island of China, has phonetically changed to resemble a tonal language retaining in principle the final syllable of PAN (or Proto Cham). This fact gives a crucial insight into the occurrence of an accent after the loss of PAN/PMP syllables in AJ.

In a comparative list I classify Austronesian-derived Japanese vocabularies into several categories such as rice-related terms, wind and direction names, and basic color terms.

1　はじめに
2　オーストロネシア祖語から古代日本語へ
2.1　祖語形の継承
2.2　音変化の法則
2.3　各変化例
3　いくつかの民俗語彙例
3.1　イネ関連
3.2　風・方位
3.3　色彩
4　「ハ行転呼音」の問題点
5　むすびにかえて

1　はじめに

日本語の系統を単系論でいくら述べても決して埒があかないことは，これまでに議論され尽くした系統論史が如実に物語る。日本語は，北方のツングース諸語および南方のオーストロネシア語族の両文法要素を継承する混合言語である。そして何よりも重要なのは，現在，言語分布からは往事から後退して日本・琉球列島を挟んで南北で対峙するのが，北のツングース諸語，南のオーストロネシア語族という事実である。このような日本語のオーストロネシア語族を中心とした言語混合説は，単なる示唆や言及から具体的内容，実証性，証明力までその内容は必ずしも同一ではないが，1924年以降現在まで，E. D. ポリワーノフ，村山七郎，B. コムリーほか，S. A. Wurm et al.，板橋義三らによっても提唱されており，筆者の独創的アイデアというわけではない。本稿では再説しないが，このような従来の系統説ならびにその問題点，言語混合の考え方については崎山（2010）を参照していただきたい。とくに，日本語史において言語混合という視点から考えなければ説明のつかない現象がいくつもあるが，それらは本稿において重ねてふれることになろう。

これまで発表したいくつかの拙稿で日本語におけるオーストロネシア系語源の結論部分だけを述べたものが多かったが，本稿は，その根拠を音法則によって明らかにし，また意味変化についても民俗知識に基づいた説明を行う。引用語例は筆者がすでに述べたものも含まれるが（これに関しては本稿で補足説明したものはあるが訂正しなければならないものはない），多くは本稿で初めて提示するものである。他者によって言及された語源説については，その妥当性を検討する。また日本語史の研究においてこれまで明らかになったこと，不明なことを明確に区別して述べる。そしてその論述の過程において日本語音韻史でこれまであいまいであったハ行・ワ行仮名遣いの問題点を摘出する。

2　オーストロネシア祖語から古代日本語へ

オーストロネシア語族（その祖語形：PAN）は日本・琉球列島の南で台湾，フィリピン，インドネシアに連なり，西はマダガスカル，東はポリネシアまで扇状に広がる大語族を形成する。所属する言語は世界の言語の五分の一，約 1,300 語に達する。従来，オーストロネシア語族はマライ・ポリネシア語族とシノニムであったが，新しい分類では台湾諸語を除いた言語をマライ・ポリネシア語派（その祖語形：PMP）と呼ぶ。紀元前 4,000 年頃，中国大陸南部から台湾に移動した民族集団は細縄文（縄席文）土器文化をもちイネと雑穀類の栽培を行っていたことが知られるが（Bellwood 1997），さらに紀元前 3,000 年頃以降（日本の縄文中期），集団の一部が台湾を南下し，現在のマライ・ポリネシア語派が形成された。日本列島に最初に渡来したのはこの語派の分派と考えられる。また従来，メラネシア語派，ポリネシア語派と呼ばれた語派はオセアニア諸語に統一される。オセアニア諸語の分岐は紀元前 2,000 年紀に起ったが，これはニューギニア島北方のビスマーク諸島におけるラピタ土器の出現時期とも一致する。本稿ではオセアニア諸語を除いた西部マライ・ポリネシア諸語の祖語形を PWMP と略す。

オーストロネシア語族は複音節語が語根として祖語形が再構成され，この語形が PAN をはじめ，地域的な二次的祖語形としても認定される。またオーストロネシア語族の周縁では祖語形の語末子音脱落（apocope）が起こる。そのほか子音における有声・無声の音韻的対立を失ったことは，メラネシア地域では例外も認められるけれどもオセアニア諸語の音韻変化の特徴であり，日本列島に渡来した分派にもこの傾向が現れて当然である。この意味では，オーストロネシア語族は古代日本語とオセアニ

ア諸語において変化の軌を一にしていることになる。オセアニア諸語の形成については，このような音特徴のほか接辞法についても PAN/PWMP からの大きな衰退がみられる。このような変化については，オセアニア諸語の形成は PWMP が非オーストロネシア系先住民族の言語（パプア諸語）との混合，クレオール化をつうじて行われたという説明がすでになされている（Ray 1926）。日本列島において古代日本語（古日）から上代日本語（上日）にかけ有声・無声子音の対立が復活したことは通常の言語学理論では説明できず，古日で起こった言語接触（日本語史の場合，ツングース諸語）による言語混合を視野に入れなければならないと考えられる。ツングース祖語には標準的な有声・無声子音の対立がある（池上 2000）。またこれまで，PAN と古日の語彙の比較が進展しなかった原因に，語末子音まで含む語形全体の対応に固執しすぎていた点を指摘できよう。オセアニア比較言語学では PAN との語末子音との対応について，その痕跡には注意を払うけれども考慮しないのが通常である。中国・海南島のマライ・ポリネシア語派，回輝語の場合も全語形対応のみを念頭におくと，かつてそう考えられたように系統不明という結果になってしまう。

PAN におけるアクセント体系は弁別的アクセントをもつ台湾とフィリピンの諸言語の比較からも明らかでない。東南アジア内陸部の単音節言語でオーストロネシア語族との系統的関係が示唆されているカム・タイ諸語では PAN の語末音節，モン・クメール諸語では語頭音節とよく対応することも，PAN のアクセントに弁別性がなかったことの証拠となる。そして複音節の単音節化による代償の結果，声調を発生させた言語もある。マレー諸語の一つ，インドシナ半島のチャム語（『後漢書・南蛮西南夷列伝』で西暦 2 世紀の林邑国，後の占城国の言語）から西暦 10 世紀以降に分岐した回輝語（自称 Poi^{24} Tsaan^{21}「占語」右肩数字は声調を表す）はその例である。回輝語では原則的に語末音節が維持されるのは，もとになったチャム語の影響によるとみられる。そして回輝語がこのような単音節化に傾斜したのには，海南島で黎語，海南語，中国語を始めとする単音節言語との言語接触による原因を当然，想定しなければならない。

2.1　祖語形の継承

次の表は，PAN/PMP/PWMP から古日，上日への変化を示したもので，初稿（崎山 2001）に補正を施し注釈を加える。PAN は表記を一部改めた Dempwolff（1938），および Wurm and Wilson（1975），Blust（1976; 1980–1989）による。PAN から古代日本語への変化は，語頭音節由来（1 群），語末音節由来（2 群），音節全体（3 群）という分類をする。1 群，2 群は祖語形の単音節を継承するが，代償延長をして長音節化

したと判断される。また平安末期の『類聚名義抄』に記されたアクセントは現代京都方言と同じでない。上日からの引用例は原則的に小学館『日本国語大辞典』2001–2002，2 版（『日国辞』），三省堂『時代別国語大辞典（上代編）』1996（『時国辞』）から選抜する。また『類聚名義抄』（『名義抄』）は望月（1974）による。本稿で引用するオーストロネシア諸語の略号は次のとおりである。祖語形中のカッコ（主として前鼻音）はその前鼻音を含む・含まないの二者択一，また各言語例のカッコは祖語形から由来しない部分を表す。

台湾諸語：

アミ語（Ami）：アタヤル語（Ata）：ブヌン語（Bun）：パイワン語（Pai）：パゼヘ語（Paz）。

西部マライ・ポリネシア諸語：

アクラノン語（Akl）：バタンガン語（Bat）：ビコル語（Bik）：セブアノ語（Ceb）：チャム語（Cham）：チャモロ語（Chmr）：ガヨ語（Gay）：イバナグ語（Iba）：ジャワ語（Jav）：回輝語（回）：カパンパンガン語（Kap）：マダガスカル語（Mad）：マレー語（Mal）：マノボ語（Mano）：マンヤン語（Mang）：マラナオ語（Mara）：パラオ語（Pal）：サンギル語（San）：スバヌン語（Sub）：タガログ語（Tag）：トバ・バタク語（Tob）：ンガジュ・ダヤク語（Nga）。

オセアニア諸語：

アロシ語（Aro）：フィジ語（Fij）：ハワイ語（Haw）：キリバス語（Kir）：マルケサス語（Marq）：サア語（Sa’a）：サモア語（Sam）：トンガ語（Ton）：ウラワ語（Ula）。

PAN/PMP/PWMP	チャム語（ヴィエトナム）	回輝語（海南島）	古代・上代日本語	平安末期『類聚名義抄』	現代日本語（京都方言）
1 群					
01) *taŋan「手」(PMP)	taŋin	ŋaan^{33}	*taa/*ta-i[i)]	テー	タ-/ テー「手」
02) *mata「目」(PMP)	mu’ta	ta^{33}	*maa/*ma-i[ii)]	メー	マ-/ メー「目」
03) *ŋajan「名」(PAN)	aŋan	nan^{33}	naa	ナー	ナ-/ ナー「名」
04) *baRaŋ「臼歯」(PWMP)	—	—	paa	ハー	ハ-/ ハー「歯」
05) *kaən「食う」(PAN)	ke’「咬む」	kau^{24}	*kaa /*ka-i	ケー	—　「(御)食」
2 群					
06) *apuy「火」(PMP)	apuy	pui^{33}	fəi	ヒー	ホ-/ ヒー「火」
07) *babuy「猪」(PWMP)	pabuy	phui^{33}	*fa(f/w)uy > wəi	キー	イ-/ イー「亥」
08) *kaməy「我々」(PMP)	kami	mi^{33}	məi	ミー	ミー　「身」
09) *tuwak「酒」(PWMP)	—	—	*waa[iii)]	(ミ)ワ	—　「神酒」
10) *inum「飲む」(PMP)	(mu’)nyum	(hui^{35})	num-i[iv)]	ノミ	ノミ-「飲み」
3 群					
11) *tanəh「低地」(PMP)	tanu’h	na^{55}	tani[v)]	タニ	タニ　「谷」

12) *qumbi「芋」(PAN)	habei	phai[11]	umo	ウモ	（**イ**モ)「芋」
13) *əsuŋ「臼」(PWMP)	lathuŋ	suŋ[33]	usu	ウ**ス**	ウス「臼」
14) *kahuy「木」(PAN)	kayow	ʔiu[55]	kəi	キー	コ-/ キー「木」
15) *ikan「魚」(PMP)	ikan/kan	kaan[33]	ika-[vi]	—	イカ-「鮹子」
16) *taŋis「泣く」(PMP)	—	—	na(k/g)i-[vii]	**ナ**キ	**ナキ**-「泣き」

（* は再構形，—は対応例なし，ボールド体はアクセント高）

i)　祖語形の単音節部分は上日の複合語で維持される。タ - な - こころ「太奈古古路＝掌」『和名抄』，タ - な - こころ「掌」『名義抄』。な（の）はオーストロネシア系連結（同格）小辞に相当すると考えられ，現在，フィリピン・ルソン島のタガログ語の ma-baít na batà [bátaʔ]「利口な子供」のような表現にみられる。-i はオーストロネシア系の属格接尾辞。同様の複合語形成は以下の ii), vi) の例においても認められる。なお，テー「堤＝手」『日本書紀』（継体 7）は古日で乙類か。

ii)　上日　マ - な - こ「万奈古＝睛」『新撰字鏡』，マ - な - こ「目，眼」『名義抄』。

iii)　上日　み - ワ「味酒瀰和」『日本書紀』（崇神 8），「三輪＝神酒」『万葉集』（2: 202），ミ禾「神酒」『名義抄』。また『土佐国風土記』（逸文）に神河は三輪川とよみ，大神のため酒を醸造するための水とある。奈良・桜井，またその分祀社である大阪・富田ほかの三輪神社は酒神をまつる。三輪は大神とも美和とも書かれる。御甕で酒を醸したからミワと言うが甕をワという根拠はない（『時国辞』）という説明は混乱している。

iv)　古日の動詞活用の中心は連用形で，後の終止形，命令形，連体形の機能も帯びる。また未然形と已然形の区別はなく，已然形の成立はもっとも遅れたと考えられる（福田 1957）。以下の該当する項目では連用形が指示的機能をもつオーストロネシア系接尾辞 -i で形成されることを示すが，古日の連用形は同時に名詞形ともなり，現代語でもその機能は維持されている。なお，10) *inum, 32) *ləkət, 46) *supsup, 48) *timbun, 49) *dakəp, 51) *ṭakṭak, 64) *ɲamɲam, 67) *wakaq, 76) *suwan, 3.3　ii) を参照。ただし，古日における連用形以外の活用形，助詞の起源はその多くをツングース祖語に負っている。具体的には村山・大林（1973），崎山（1999）を参照。ただし，終止形の成立過程についてはいまだ不明な点が多い。

v)　地名を含むタニ「谷」の分布は西日本で卓越し，東日本のヤツ / ヤチ / ヤ「谷，低湿地」と方言地理的対立をなす。地名の「渋谷」は京都でシブタニ，東京でシブヤと呼ぶ。『常陸国風土記』（717–724）の「夜刀神＝蛇」はヤツの最古例である。ヤツのアイヌ語説（柳田国男『遠野物語』1910）は誤りでむしろその逆とみられ，語源としてツングース祖語形の *dətu「沼沢」との関係が示唆される（池

上 1985）。このような日本列島における東西の語彙的対立が，このほかにも西日本を中心として 15) イカ，21) ユマ，36) ホキ，39) ホロ，73) ヨネ，82) ハイの分布にみられるのは，オーストロネシア民族の初期移動に関わりがあると考えられる。

vi) 上日イカは「烏賊」説があるが説得力を欠く。烏賊は魚類ではない。イカ-ナ-ゴ（*Ammodytes personatus*）は「三月の旬になると，明石海峡では潮の縁の下から下から沸いてくる」（鷲尾圭司「なぎさ海道」『朝日新聞』1998/3/31）と言う。「魚の子」という命名を彷彿とさせる。イカナゴの分布は西日本で卓越し，東日本（関東，東北，北陸）ではコウナゴという方言が多い。

vii) ナキはオーストロネシア語系の接頭辞 *ma- を伴った *maN-taŋis > *ma-naŋis に由来する。*ma- は前鼻音化なしで状態（類例は 38) *ma-bulat, 55) *ma-tipis），前鼻音化付きで他動詞化（類例は 49) *maN-dakəp, 53) *maN-tənun）を表す機能があった。この例は「泣きを泣く」という同族目的語の例である。

奈良時代の日本語の音韻問題において清音・濁音（無声音・有声音）が別個の音韻であったか否かはいまだ決定的に明らかにされていない（大野 1953）と言われるが，古日には無声音・有声音の音韻的対立はなかったようである（橋本 1950b）。その理由として，語源の判明している語彙だけをみても，語頭で有声音を持つ語は漢語を含め由来が新しいこと，語中では無声子音が母音間で有声化する例がほとんどであることが指摘できる。ただし，『日本書紀』の場合，歌謡と訓注にはすでに清濁の音韻的区別が表記し分けられていたようである（大野 1953）。しかし，ナキ「泣き」は万葉仮名でナキ「奈吉」『万葉集』（14: 3569）とも ナギ / ナキ「奈伎」『万葉集』（14: 3485）とも書かれている。万葉仮名の類別は橋本（1950c）による。フィリピン・ルソン島のパンガシナン語の akís は *taŋis に由来すると考えられるが，語中の *-ŋ- からの変化は古日と同じである。1 で述べたように，一旦失った清音・濁音の対立が復活したのは，言語接触による結果である。ただし，有声・無声の機能負担量（functional load）の点からはバランスを欠いていた（有声の効率が低い）のではないかと考えられ，現代日本語においても清濁音の対立に語の「含蓄的」意味を区別する機能がいまだに認められる（鈴木 1962）。これは，上日の音韻史における有声・無声対立の余韻を今なお引きずっていることになる。

2.2　音変化の法則

PAN の音韻体系はさほど複雑ではない。子音 /p : b : m, t : d : n, ṭ : ḍ : ṇ, c : j : ɲ, k : g : ŋ, s : z : Z, l, r, R, q, h, H, S/，半母音 /w, y/，母音 /a, i, u, ə/ から構成される。有声硬口蓋破裂音 j[ɟ] は語頭に現れず，またそり舌鼻音 ṇ は ṭ, ḍ の前鼻音としてしか現れない。このうち Z, H, S は音対応系列の違いから再構成されたもので音声学的な特徴を詮索することは意図されていない。古日，上日への音変化の法則は次のとおりである。以下で例示する語例は 3 群に属する。音法則について（この法則というのは未来も予知できる自然科学の概念とはまったく異なるが，過去の事実の集約的知見という意味で社会科学の概念に近い），比較言語学で音法則を設定するためには具体例が最少で 3 例あればよいと言われるが，PAN から古日への音法則を支持する例は以下でみられるとおり 3 例どころではない。

I:　*R > *y（ただし，ツングース祖語形 *d > *y）
II:　*q, *h, *H, *S > ゼロ
III:　*l-/*r-（語頭）; *-l-/*-r-（語中）> * t- ;*-r-
IV:　*b, *p > *f /*ɸ > h（古日で同じ唇音の X: *w と混乱し「ハ行転呼音」となる）
V:　*d /*ḍ ; *t /*ṭ > *t
VI:　*k/*g ; *-ŋ-/*-ŋk-/*-ŋg-（語中）> *k
VII:　*c, *j, *s, *z, *Z > *s
VIII:　*m > *m
IX:　*n, * ɲ > *n
X:　*w > *w
XI:　*y > *y
XII:　単母音は *a, *i, *u > *a, *i/*e, *u/*o のほか，*ə > *i, *u, *o は同化による変化を含む。二重母音は *ai > *ë, *au > *ö, *ui/*əi > *ï と変化しすべて乙類。

2.3　各変化例

以下に上に示した法則を変化例とともに説明を付し掲げる。

I（*R > *y）への変化例：

祖語音から諸言語間でもっとも多種の音対応を示すのが *R（Dempwolff はギリシ

ア文字のガンマ［有声軟口蓋摩擦音 ɣ］を祖語音として措定した）で，/r,l,s,z,g,h, ゼロ / のように摩擦音を中心とした対応系である。フィリピン・ルソン島のカパンパンガン語では古日と同様，*R は原則的に y に変化する（Blust 1980）。ツングース（アルタイ）祖語形からの変化と具体例については村山・大林（1973）を参照。

村山七郎は *R の上日における変化に対し y, r, ゼロとするなど多重対応（multiple reflexes）の弊に陥っている。このうち，17) *Rabut, 20) *Rəbi からの変化は村山によってすでに指摘されている（1978）。しかし一方で，*kaRaŋ（PWMP）「乾いた」> 上日　カラ「枯」（村山 1988），04) *baRaŋ「臼歯」> 上日　ハ「歯」を語源とする。この最後の例については，筆者は 1 群として分類するから，多重対応の問題は起こらない。村山みずからは *R の変化について「まだ十分に究明されていない」（1978）と言い，半信半疑であったことを伺わせる。しかし，意味変化から 80) *baRat「西風」を「ハエ＝南風」，*baRani（PWMP）「勇敢な」を「ハヤト」に当てる村山説（1973）に筆者は賛成できない。またハヤトの語源は 82) *paRi を参照。さらに，Itabashi（2011）も PWMP *R が古日 *y と対応するとみるのは良いが，これが由来する PAN の祖語音をゼロ（*O）とし，一方，PAN（PWMP）*k/*R を古日 *k と対応するとみる混乱がある。

語頭では，

17) *Rabut（PMP）「破る」> rabut「はがれた」（Mal）: (ma)rabut（Nga）「裂く」: gabot「引き抜いた」（Tag）: avotra「引き抜いた」（Mad）: lehu（Sa’a）。
古日 *yafu- > 上日　ヤフ - り「破夫利」『万葉集』（16: 3880），ヤフ - れ「残」『東大寺諷誦文平安初期点』，ヤフ - る「傷」『名義抄』。

18) *Rakit (PWMP)「筏」> rakit（Mal）: rakkit（Tob）: rakit/rikit（Cham）: zahitra（Mad）。
古日 *yika（母音のメタテシス）> 上日　イカ - だ「五十日太＝筏」『万葉集』（1: 50），イカ - た「以賀多＝桴」『和名抄』。
語末の - たは語源不明，板説があるが筏は木竹を組んだもので板ではない。祖語形には「結び合わす」という意味も与えられている。

19) *Ratus (PMP)「百」> ratus「百」（Mal）: ratus（Tob）: gatós「膨大な数（万, 億）」（Tag）: ratuh「百」（Cham）: tu33「百」（回）: zato「百」（Mad）: lau（Sa’a）。
古日 *yatu > 上日　ヤツ「夜豆＝八」『万葉集』（20: 4351），ヤツ「八」/ ヤソ「八十」『名義抄』。
上日　ヤツは，ヤツ - を「八峰」，ヤツ - あたり「八当」，ヤツ - かき / ヤエかき「八垣」，ヤツ - さき「八裂」などすべて限定された数を示す数詞ではなく，

もの（こと）の多さを指す形容詞または接頭辞に過ぎない。このように数の多さをヤツという認識はオーストロネシア文化を継承する。しかし，上日におけるヤツはその後，平安時代には文字「八」の末広の字形に連合し，さらなる展開をみたのである。また数詞ヤは，ヒ：フ，ミ：ム，ヨ：ヤの倍数法から発生したもので（この現象を初めて指摘したのは江戸前期の荻生徂徠『南留別志』（1736）とされる），ヤツを数詞のヤに結びつけたのは後世の民間語源であろう。同様の倍数法は，ニューギニア島のオセアニア諸語のモトゥ語にもみられるが，無論，これは語史的にみても偶然の一致である。村山は日本語の数詞を雑多な起源ともつとみなし，PAN，アルタイ系，朝鮮語と比較しているが（村山 1974b），数詞（とくに小数）は意味論的に閉じた系をなす項目であるから，そのような混成部隊の状態は考えにくい。「八代」はヤツシロともヤシロとも言う。上日ですでにそうであったことは，ヤ - あた / ヤ - た「八阿多＝八尺」『古事記』（上），ヤ - しま「夜斯麻＝八島」『古事記』（上），ヤ - かぜ「八風＝多風」『伊勢国風土記』（逸文）によって知られる。日本語の数の起源について最初からそれが数詞であったかどうか明らかでない（安田 2009）と言われる。イツ「一, 五」については 29) *qituŋ を参照。

20) *Rəbi (PMP)「夕，夜」> robi（Tob）: gabí（Tag）: (yak)avi（Fij）: afi-afi（Sam）: efi-efi（Ton）。
古日 *yofi > 上日　ヨヒ（yöhi）「豫臂＝宵」『日本書紀』（允恭 8），こ - ヨヒ「虚豫比＝今宵」『日本書紀』（允恭 8），ヨヒ「夕」『名義抄』。

Dempwolff は *Rabi (PMP) と再構成するが，語頭母音が例外的なトバ・バタク語，トンガ語から筆者は二次形 *Rəbi（PMP）をたてる。*Rabi と同じ音環境ならば，トバ・バタク語，トンガ語はそれぞれ，25) *maRi > mari : mai, 28)*qa(m)pit > appit : api-api, 79) *aŋin > angin : agi, 82) *paRi > pare : fai のように規則的な母音変化をするからである。また Tsuchida（1976）は laviʔi（Ami）: gəbiy-an :（Ata）: labi-an（Bun）などの台湾諸語の対応から *RabiʔiH$_2$（PAN）をたてるが（この場合もアタヤル語の語頭母音は例外となる），古日はこの形に由来しないことが明らかである。上日 yöhi は乙類（豫）と甲類（臂，比）が一語内に共存し特殊仮名遣いに反する例である。この理由について PAN から適切な説明をすることができない。大野（1953）は，虚豫比の語頭の虚（乙類）が後続の語を同化したとみる。しかし，なぜ同化が語全体に及ばなかったのかという疑問が残る。類例に 73) *qənay を参照。なお，江戸前期の貝原益軒『日本釈明』（1699）がヨヰ「夜居」

と記すのは混乱例。

21) *Rumaq（PAN）「家」> lumaq（Ami）: lumah（Bun）: umaq（Pai）: xuma?（Paz）: rumah（Mal）: huma（Nga）: rumah/ramah（Cham）: zuma「洞穴」（Mad）: lume（Sa'a）。

主として西日本の方言に集中するヨマ「座敷」（山口・大島，愛媛・松山），「台所」（高知・土佐，岐阜・飛騨），「隠居家」（長崎・対馬）など。やや特殊な意味変化がみられるのはマダガスカル語でも同じである。この語は「居間」と関係がないことは語頭母音の違い，方言分布によって明らかであるが，- マに「間」を当てるのは民間語源である。

語中では，

22) *daRi（PMP）「イケカツオ属の一種」（*Scomberoides* sp.）> hagi「イケカツオ属の一種」（*Scomberoides sancti-petri*）（Chmr）: (y)as「イケカツオ」（*Scomberoides lysan*）（Pal）: (n)ari「イケカツオ属の一種」（*Chorinemus tol*）（Kir）: lai（Sam）: lai/lae（Haw）: 'ai'ai「イケカツオ」（Marq）。

古日 *tayi > 上日　タヒ「多比＝鯛」『平城宮址出土木簡』，タヒ「鯛，平魚」『名義抄』，くろ - タヒ「尨魚」『名義抄』。

上日にはヤ行のイ（yi）を表す文字がなかったため，ア行のイとの発音の違いは明瞭に意識されず同一の音と考えていた（橋本 1950c）。本項目の類例として 25) *maRi, 82) *paRi があるが，いずれの場合もア行のイと区別がつかないための変則的な変化が発生し，後の仮名遣いにまで及んでいる。「鯛の浦」の異称とされる「タエ - の - うら」（千葉・鴨川）という海域名はタイという二重母音を避けるために taye という形が存在したことを示唆する。現在，タエに形容動詞の「妙」の当て字が行われることがあるが文法的にも意味をなさない。なお，ハイ / ハエにも同じ関係が認められる。上日のタヒという仮名遣いは *tayi に対するハ行転呼音とは逆の混乱例である。

日本で魚種の変化が起こったのは，アジ科イケカツオ属の生息域は南日本から南太平洋，タイ科マダイ（*Pagrus major*）は北西太平洋で相補的分布することと関係があろう。科は異なるが，生魚の体長はほぼ同じ，体形は側扁し外洋付近で単独で行動するなどの共通点がある。『万葉集』（9: 1740），『延喜式』にも漢語「鯛」が出ているが，中国では鯛は下等魚とされる。庶民の間で鯛が「目出度い」に類推し縁起物となるのは助動詞 - タシのイ音便が始まる平安以降である。

23) *duRuq/*zuRuq（PMP）「液，汁」> juruh（Mal）: (du)duh（Jav）: dugó?「血」（Tag）:

ro「煮汁」（Mad）: su（Fij）: su(a)（Sam）: luu（Ton）。

古日 *tuyu > 上日　ツユ「都由＝露，汁」『万葉集』（20: 4318），ツユ「都由」『和名抄』，ツユ「露」『名義抄』。

24) *kaRus (PAN)「掻く」> karut「かき集める」（Pai）: kágus（Ceb）: karo（Aro）。

古日 *kayu- > 上日　カユ - し「加由之＝痒し」『大般若経音義平安初期点』，カユ - し「加由之」『和名抄』，カユシ「痒」『名義抄』。

25) *maRi (PMP)「話者に向かう動作，来る」> mari（Mal）: mari（Tob）: mari（Cham）: mai（Fij）: mai（Sam）: mai（Ton）。

古日 *mayi- > 上日　マイ -（連用形）「末井留＝参ゐる」『日本書紀』（景行 4），「摩韋區例＝参ゐ - くれ」『日本書紀』（歌謡），「末為之＝参ゐし」『万葉集』（18: 4116），マイ - る / うちへマヰ - る「入」『名義抄』。

『日本書紀』の井，韋，『万葉集』の為はワ行のヰを表すから表記上の混乱と考えられる。『名義抄』はマイ -/ マヰ - の両形を記すが，前者が mayi- からの変化形，後者が混乱例である。結果的にマヰ - となった歴史的仮名遣いは語源的な正当さを失った。参るの意味は「物が貴人の手もと，居処に至る，来る」が原義で「貴人の居所に入ってゆく」が原義（『日国辞』）というのは説明が逆である。なお，82) *paRi を参照。

26) *uRaŋ（PMP）「人，人間」> orang（Mal）: wong（Jav）: urang/ra（Cham）: zaaŋ[32]（回）: ule「兄弟姉妹」‘Sippen-Geschwister’（Ula）。

古日 *uya > 上日　オヤ「於夜＝親」『日本書紀』（歌謡），「於夜＝祖先」『万葉集』（18: 4094），とほつ - ヲヤ / とほつ - オヤ「上祖，高祖父」『名義抄』。

「人」が限定的な親族関係を表すことはソロモン諸島のウラワ語にみられるが，マレー語においては tua「老いた」（56) *tuwa 参照）を伴った orang tua が「親，先祖」を意味し，上日における発想と共通する。

さらに語中では 69)*bəRas, 80)*baRat, 81)*bəRu, 82)*paRi を参照。

II（*q, *h, *H, *S > ゼロ）への変化例：

27) *qasap（PWMP）「煙」> asap（Mal）: asap（Tob）: asep（Nga）: asáp/hasáp（Tag）。

古日 *asa > 上日　アサ - ま「浅間」『山家集』（12 世紀）。

寺田寅彦が浅間をマレー語に結びつけたのは語呂合わせにすぎないとけなし，アサは「崩崖」と強弁する（楠原ほか 1981）ほうがむしろ根拠を欠く。なお，アソについて 3.3 i) を参照。

28) *qa(m)pit（PMP）「まとまる」> apit「挟む」（Mal）: appit（Tob）: hapit（Tag）「絞める」: afitra「留める」（Mad）: epi「脇に抱える」（Sa'a）: api-api「狭い」（Sam）: 'api-'api「締める」（Ton）。

古日 *afi- > 上日　アヒ - み「阿比瀰＝相見」『日本書紀』（歌謡），アフ「阿布＝合う」『日本書紀』（歌謡），アハ - ね「阿波禰＝合わね」『万葉集』（14: 3482），アフ「遇，相，合」『名義抄』。

「合う」の原義は「物と物が寄り合って（狭まって）一つになる」『日国辞』ことである。アウの歴史的仮名遣いをアフとすることに問題ない。

29) *qituŋ（PMP）「数える」> hitung（Mal）: etong（Tob）: itong（Nga）: idru（Sa'a）。

古日 *itu > 上日　イツ「伊都＝五」『万葉集』（5: 880）/「伊都＝何時」『万葉集』（15: 3705），イヅ - く「伊豆久＝何処」『古事記』（中・歌謡），イヅ「伊豆＝何処」『万葉集』（14: 3549），イツ - つ「五」『名義抄』，イツ - くそ「扨何」『名義抄』。

数詞「一」は，上古中国語 *iĕt に由来する中国語の呉音が西暦 6 世紀以降の推古時代の上日ではイチとして，さらに 8–9 世紀の平安時代には漢音のイツとして借用された。また平安以降，イチから促音イッが発生した。しかし，『諸橋大漢和辞典』の「一」の項目には「教一識百」のような少数の熟語以外にイツと読ませる例はまったく示されていない。筆者はイツ「一」が漢語のイチを借用する以前から古日に存在したと推定する。その根拠としてイツが不定詞「何時」，副詞「何時も」，また疑問代名詞のイヅ「何処」とも同じ語源とみなされる（『時国辞』）からであり，このような基礎的な語彙群が平安以降の漢語の借用によって発生したのではないことは上日の『古事記』，『万葉集』の例が証明する。ただし，類型論的な現象として不定詞は数詞「一」と意味的に密接な関係にあることは英語の one（anyone），ドイツ語の ein，マレー語の suatu「一つ，或る」のほか，漢語でもイチ（イッ）が「一書」で「或る書」を意味することから分かる。古日のイツは文法的な数詞ではなく，「一」（これから不定詞や疑問詞が派生した）と「五」を同時に含蓄する。しかし，イツは上日で数詞「一」の機能を，たまたま語末母音以外では発音の類似した漢語イチに譲った，と考えられる。語中では，ゆいイチ「唯一」がゆいイツとも言われるのは混乱例であろう。古日の「一, 五」を意味したイツがその共通項としてもつのは手指しかない。古日のもとの意味は一（親指）から五（小指）まで指折り数えた（数え方にはその逆の場合もあり得る）とみなす根拠である。なお，古日の数詞の起源について 19) *Ratus を参照。

さらに 12)*qumbi,73) *qənay, 75) *Səmay, 81) *qaRu を参照。

III（*l-/*r-（語頭）; *-l-/*-r-（語中）>* t- ;*-r-）への変化例：

上日においてラ行音が語頭に現れないことは，すでに幾人かの人によって指摘されアルタイ諸語の特徴であると言われている（村山・大林 1973）。ここに示したようなオーストロネシア系の語彙にもそれが認められることは，日本列島に先住したアルタイ系言語（ツングース諸語）の音韻体系に則り，言語混合によって接触変化したことを意味する。

語頭では，

30) *labuq（PWMP）「落ちる」> labuh（Mal）: labu（Tob）: lawo（Nga）: lavo（Mad）。
古日 *tafu- > 上日　タフ - る「太不留＝倒る」『新撰字鏡』。
ただし，『名義抄』ではタフ - る「倒」のほかタウ - る「戦」と記す乱れがある。

31) *layu（PWMP）「衰える」> layu「萎れる」（Mal）: layo(n)（Jav）: (ba)layu（Nga）: lazo（Mad）。
古日 *tayu- > 上日　タユ - き「手懈＝弛」『万葉集』（12: 3183），タユ - む「怠，懈，舒」『名義抄』。
当初，村山はこの祖語形に nayu ナユ「萎」を当てる一方（1975），33) *luwaq は tupa ツハ「唾」と関係させ（村山 1974a）多重対応になっていた。しかしその後，本祖語形からの変化をタユ「弛」に改めた（村山 1978）のは正当であった。

32) *ləkət（PWMP）「付く」> ləkat（Mal）: lohot（Tob）: leket（Nga）。
古日 *tuk-i- > 上日　ツキ（連用形）「都枳＝付き」『万葉集』（20: 4388）。

33) *luwaq（PMP）「吐く」> luah（Mal）: luwáʔ（Tag）: (ma)lua（Nga）: loa（Mad）: lua（Fij）: lua(i)（Sam）: lua（Ton）。
古日 *tuwa > 上日　ツハ - き「都波岐＝唾」『新撰字鏡』，ツハ - き「涎，痰」『名義抄』。
ただし，ツワ（tçuua『日葡辞書』1603）が歴史的には正しく，ツハはハ行転呼音と逆の表記である。類例に 56) *tuwa, 87) *awaŋ がある。

語中では，

34) *ulaR（PMWP）「蛇」> ular（Mal）: ulak（Cham）: (ʔa)la[33]（回）: olatra（Mad）。
古日 *ura/*uro > 上日　ヲロ - ち「遠呂智＝大蛇」『古事記』（上），ヲロ - ち「乎路知＝虵」『和名抄』，ヲロ - ち「虵」『名義抄』。
ウラ / オロ - は -a/-o の交替による派生語か。なお，3.3 i) を参照。- ちは「霊

威あるもの」といい（『日国辞』），ミヅ - ち「虹」の語尾と同じか。万葉仮名の遠，乎はヲを表す。この場合，祖語形の語頭母音が入り渡りの w- を伴い，*woro- が起源なのか，奈良時代のア行との混乱なのかという問題が起こる。ただし，次の 35) から判断してもいずれが正答かを決せられない。なお，村山はヲロ - ちをオルチャ語（ツングース諸語の一つ）の vərə-「蛇」に比当するが，これは祖語形ではなく単発であり偶然の似寄りも排除できない。一方で満州語の数詞「九」uyun/uyutu もヲロ - ち「九岐大蛇（?）」と無関係ではあるまい（1995）と述べ，首尾一貫しない。

35) *ucap（PMP）「述べる」> ucap（Mal）: usap（Tob）: usap（Tag）: (v)osa（Fij）。
古日 *usa > 上日　ヲサ「長，譯」『名義抄』。

『源氏物語』，『大鏡』などではオサと書かれているから『名義抄』のア行混乱も否定できない。意味的にスピーカーが議長（the Speaker）になるのはいつの世も変わらない。ヲサ「長」とヲサ「通事」の項目を別にたて異なる語源であるかのような扱いにするが（『時国辞』，『日国辞』），意味的にはっきり分かれたのは平安以降であろう。

さらに語中では 38) *bulat, 39) *bulu, 54) *təraŋ, 58) *gilaŋ, 60) *guluŋ, 61) *kilat, 84) *silak, 85) *gəlap を参照。

IV（*b, *p > *f /*ɸ > h）への変化例：

語頭では，

36) *bukid（PMP）「丘，台地」> bukit「丘」（Mal）: bukid（Tag）「畑，田舎」: vohitra/bokitra「丘・盛り上がった」（Mad）: buke-buke「土山」（Fij）: pu‘e「土山」（Sam）: puke（Ton）。

古日 *fuki の変化形ホキ（二次形ホケ）は「崖」を意味し，『山家集』や『日葡辞書』に foqi- の語例があるが，九州，四国に多い地名とされる（楠原ほか 1981）。意味変化的には丘の斜面は崖である。徳島の大歩危小歩危もその例であるが，渓谷を挟んで丘が迫る。なお，ヤマ「山」の語源はアルタイ祖語形の *da(m)ban「峠」が指摘される（村山・大林 1973）。

37) *bu(ŋ)kul (PWMP)「瘤」> bongkol/bonggol（Mal）: bungkul（Jav）: bungkol（Nga）: bukol（Tag）。
古日 *fuku- > 上日　フク - れ「布久礼＝脹れ」『万葉集』（16: 3821），フク - る「布久流＝肉憤起」『和名抄』，フク - れたり「脹」『名義抄』。なお，86) *a(ŋ)kat を参

照。

38) *bulat/*ma(N)-bulat (PMP)「丸い」> bulat（Mal）: bulat（Nga）: balat/bulut（Cham）: pulat(o‘a)「目を丸くする，熟視する」（Sam）: (faka)pula(mata)「目を丸くする」（Ton）。
古日 *ma-fura > 上日　ま - ホラ「麻保良」『万葉集』（5: 800），ま - ホロ - ば「麻本呂 - 婆」『古事記』（中・歌謡）。

「大和は国のマホロバ」『古事記』のように国土への美称として用いられたま - ホラ -（ま - ホロ - は順行同化による二次形）は「円い」に由来する。小山（1966）は，縄文時代の遺物や遺稿に時代を通して繰り返し現れるパターンは同心円であり集落も円形である，縄文人はマンダラの円輪と酷似した世界観をもっていたと述べる。丸く閉じて完璧な世界観は古日で「丸い状態にある」と表現された。マ - はオーストロネシア系の前鼻音化なしの接頭辞で状態を表し，上日でもまだその機能は残っていたと考えられる。したがって，マを美称，ホを秀・穂，ラを接尾語と説く司馬遼太郎の音義説（『縄文まほろば博・縄文の扉』1996）には従うことができない。ただし，ホラ -（ホロ -）は接頭辞とともに平安以降，廃れてしまった。

39) *bulu（PMP）「毛，羽」> bulu（Mal）: bulo「綿毛」（Tag）: volo（Mad）: vulu(a) ‘pubes’（Fij）: fulu「羽」（Sam）: fulu（Ton）。

主として九州，四国の方言に広がるホロ「鳥の羽毛」（熊本南部，鹿児島・薩摩），「羽毛の疑似餌」（徳島・海部，長崎・壱岐）がオーストロネシア系であることは村山（1974b）によって指摘されているが，問題はない。ただし，『日国辞』は肋骨を意味するホロ『色葉字類抄』（1177–1181）を原義とし，羽毛を同じ見出しで扱うのは不可解である。

40) *butuq（PWMP）‘penis’ > butuh（Mal）: botó?（Tag）: voto（Mad）。
古日 *futu > 上日　ホト「富登＝陰」『古事記』（中），ホト「陰」（北野本訓）『日本書紀』（崇神 10）。

上日で性の転換が起こったのはタブー語であるためであろう。

41) *patay/*matay（PMP）「死ぬ」> mati（Mal）: pate（Tob）: patei（Nga）: patáy（Tag）: mu’tay（Cham）: taai[32]（回）: faty/maty（Mad）: mate（Fij）: mate（Sam）: mate（Ton）。
古日 *fatai > 上日　ハテ (hatë)（連用形）「半手＝果」『万葉集』（11: 2383），ハツ - る「波都流」『万葉集』（15: 3697），ハツ - る「剔，扒」『名義抄』。

この説は村山がすでに指摘している（村山 1974b）。確かにハテには「死ぬ」

の上日例，現代の方言例（高知）もある。ただし，語源として意味的には *padəm（PWMP）「消える」> 古日 *fate が良いと考えられるが，音変化からハツは上日で下二段活用をし連用形は乙類母音となるから *fatai をより適切な形とみなす。

42) *punay（PMP）「ハト科の種類」> punai「アオバト属」（*Treron* spp.）（Mal）: punay「アオバト」（Tag）: fony/foni(ngo)「マダガスカルルリバト」（*Alectroenas madagascariensis*）（Mad）: bune[mbune]「クロアゴヒメアオバト属」（*Ptilinopus* spp.）（Fij）

古日 *funai > 上日　フネ (hunë)「赴尼＝船」『日本書紀』（歌謡），「布禰＝船」『万葉集』（17: 4027）/「夫禰＝船」『万葉集』（18: 4048），フネ「船，舫，艅，刀」『名義抄』。

高天原と地上との間を行き来する船として『古事記』（上）のアマノトリフネ「天鳥船」（アメノとも訓じられ天は美称）があり，『日本書紀』（神代・下）で熊野諸手船，またの名を「天鴿船」と言う。この鳥が鴿（＝鳩）であったことは意味変化を知るうえでの重要な契機となる。しかし，これまでの鳥船神話研究では鳥への言及に留まり，鴿を問題にした論は皆無のようである。また鳥と船とは形が似ているなどと言うのは強弁に過ぎない。鳩にこそ語源の鍵があったのである。意味変化の過程でフネ「ハト」（古日）> 鴿船（神話）> 船（上日）のように意味論でいう連鎖的変化が現れた。なお，フネのネは乙類であるが，複合語でフナ -（フナ - イリ「船入」，フナ - タマ「船霊」など）となるのは，タカ「高」/タケ「嶽，竹」，アマ「天」/ アメ「雨」などの交替に逆類推したためと考えられる。なお，3.3 ii) を参照。

43) *pusəj（PMP）「へそ」> pusat（Mal）: pusok（Tob）: puser（Nga）: pusod（Tag）: foitra（Mad）: vico-vico（Fij）: uso「臍帯」（Sam）: uho（Ton）。

古日 fusu > 上日　ホソ「保曾＝臍」『和名抄』，ホソ / ヘソ「臍」『名義抄』。

さらに語頭では 04) *baRaŋ, 06) *apuy, 65) *buŋay, 69) *bəRas, 71) *pa(n)daŋ, 72) *pajay, 80) *baRat, 82) *paRi, 83) *puyu を参照。

語中では，

44) *kapis（PMP）「二枚貝網の種類」> kapis「イタヤガイ科の一種」（*Pecten* sp.）（Mal）: kapís「マドガイ」(*Placuna placenta*)（Tag）: kápis「マドガイ」（Bik）: kai「二枚貝網」（Lamellibranchiata = Bivalvia）（Fij）。

古日 *kafi > 上日　カヒ「可比＝貝」『万葉集』（15: 3709），カヒ「貝」『名義抄』。

マドガイ（俗称，カピス貝）は中国やフィリピンで格子状の窓枠にはめガラス板のように用いられる。和名はこのような用途による命名である。総称への意味変化はフィジ語にみられる。カイの歴史的仮名遣いをカヒとすることに問題ない。

45) *kupas（PMP）「剥く」> kupas（Mal）: kupas（Nga）: kupás（Tag）: hofa「篩う」（Mad）。

古日 *kufa- > 上日　クハ - しめ「倶波絁謎＝美女」『日本書紀』（歌謡），クハ - し「細」『名義抄』。

詳しくするには，対象を剔抉（切り裂いてほじり出す）しなければならない。細やかで美しいという意味は副次的と考えられる。

46) *supsup/*səpsəp（PAN）「吸う」> copcop（Ami）: súpsúp（Bik）: sosop（Mara）。

古日 *suf-i > 上日　スヒ（連用形）「須比＝吸い」『霊異記興福寺本訓釈』，スフ「須布＝吸ふ」『華厳音義私記』，ス - ふ「吸，啐，呷，噞」『名義抄』。

Tsuchida（1976）は再構音 *θ をたて *θəpθəp（PAN）と再構成する。しかし，このような新たな音素をたてる考えはその後退けられ，本祖語形は Blust（1989）による。音声学的に無声摩擦音 s は変種が発生しやすく，言語間の対応を峻別すればするほど規則化からは遠ざかるという矛盾に陥るからである。

47) *tapis/*tapiq（PMP）「腰巻き」> tapih（Mal）: tapih（Nga）: tapíʔ（Tag）: tafy「衣類」（Mad）。

古日 *tafi > 上日　タへ「多倍」『日本書紀』（歌謡），タへ「多敝＝栲」『万葉集』（14: 3435）。

タへは布類の総称である。上日における敝は甲類母音，倍は乙類母音であるから表記に不一致がある。ただし，歴史的仮名遣いをタへとすることに問題はない。村山（1975）は *labay（PWMP）「つむぎ糸」にタへを結びつけるが不自然である。

48) *timbun/*tambun（PMP）「積む」> timbun/tambon（Mal）: tawan（Nga）: timbón/tabon（Tag）: tambo「かさ高い」（Mad）: tabon(aki)「圧倒する」（Fij）。

古日 *tum-i > 上日　ツミ - あけ（連用形）「都美安気＝積みあけ」『万葉集』（20: 4408）。

祖語形（*təmbun）は前鼻音を含むため *-mb- は古日で *-m- に変化する。12) *qumbi を参照。

さらに語中では 17) *Rabut, 20) *Rəbi, 28) *qa(m)pit, 30) *labuq, 44) *kapis, 45) *kupas, 47) *tapis, 55) *tipis, 74) *sabaq を参照。

V（*d /*ḍ ; *t /*ṭ > *t）への変化例：

語頭では，

49) *dakəp/*ma(N)-dakəp（PWMP）「抱く」> dakap/dekap（Mal）: dahop（Tob）: dakíp（Tag）: rako「合わす」（Fij）。

古日 *ma-dak-i- / tak-i- > 上日　かきむ - ダキ / ダギ（連用形）「可伎武太伎＝掻きむ抱き」『万葉集』（14: 3404），う - タキ「于田支＝抱き」『霊異記』（下），い - タク「抱，懐」/ う - タク「拱」/ む - タク「懐」/ かき - う - タク「勒」『名義抄』。

接頭辞 *ma- の前鼻音を含む祖語形 *-nd- は古日で *d に変化した可能性がある。このような接頭辞の前部を落とす現象は古ジャワ語（ジャワ語），バリ語でもみられる。ただし，上日においてダク，タクが混在していたことが『万葉集』，『霊異記』の表記からうかがえるため，祖語音が *d か *nd かを決定できない。ムダクを一語とみなし，古日 *məndak- を語源とする説がある（村山・大林 1973）。ただしその場合，イダクの説明ができない。また，ダクをイダク / ウダクの変化した語という説明（『日国辞』）も疑わしい。イ - は対象指示のオーストロネシア系接頭辞で後から付いたもの。類例には「行く / イ - 行く」「出す / イ - 出す」「のり - と（祝詞）/ イ - のり（祈）」「ます / イ - ます（在）」など多くある。

50) *dəkət/*zəkət（PMP）「近い」> dekat（Mal）: jehet「粘る（Tob）: dikít「付いた」（Tag）: so‘o「結ぶ」（Sam）: hoko-hoko（Ton）。

古日 *tika- > 上日　チカ - き「知可吉＝近き」『万葉集』（17: 3983），チカ - く「知加久」『万葉集』（15: 3764），チカ - し「傍，迫，附，隣」『名義抄』。

51) *ṭakṭak/*ṭukṭuk（PMP）「ぶつかる」> tutok（Mal）: ṭ(r)aṭa（Jav）: t(ag)uktók「打つ音」（Tag）: tataka「砕く」（Mad）: tā/tutu「叩き切る，叩く」（Fij）: tata/tu‘i「打ち砕く，叩く」（Sam）: tata/ tutuk(i)（Ton）。

古日 *tatak-i > 上日　タタキ（連用形）「多多岐＝叩き」『古事記』（上・歌謡），「多多企」『日本書紀』（継体 7），タタク「叩」『名義抄』。

古日 *tuk-i > 上日　ツク「都久＝突く」『古事記』（下・歌謡），ツク「豆久」『新撰字鏡』，ツク「觸，衝，突」『名義抄』。

この例は，母音調和を含む PMP の語家族が古日にも継承されている点で語史的にも重要である。次の 52) *taŋga も参照。

52) *taŋga（PMP）「梯子」/*tiŋgi（PMP）「高い」> tangga/tinggi（Mal）: tangga/tinggi（Nga）: tsingy [tsiŋgi]「頂上，突出部」（Mad）: taqa [taŋga]「重ねる」（Fij）。

古日 *taka- > 上日　タカ - み「多伽彌＝高み」『日本書紀』（歌謡），また接尾辞 -i

を伴う交替形，古日 *taka-i > 上日　タケ（takë）「多気＝嶽」『古事記』（上），「多気」『万葉集』（5: 873），タカ - く「多可久＝高く」『万葉集』（20: 4411）。

タケのケは乙類。この例もオーストロネシア語族にも古くは母音調和が存在したことを示すが，具体例に乏しく祖語段階での母音調和を一般化し記述することはできない。

53) *tənun/*ma(N)-tənun（PMP）「織る」> tenun（Mal）: tonun（Tob）: tenuna（Mad）。古日 *nunu > 上日　ヌノ「沼能＝布」『和名抄』，ヌノ「布」『名義抄』。

古日形は前鼻音化を伴う *ma-nənun（「織物を織る」という同族目的語）に由来する。なお，2.1 vii) を参照。

54) *təraŋ（PWMP）「明るい」> terang（Mal）: torang（Tob）: tarang（Nga）: talang「紅雲」（Tag）。

古日 *tira-/*tera- > 上日　テラ - す「弖良須＝照らす」『万葉集』（20: 4486），テラ - す「氐良須」『新撰字鏡』，テラ - す「照」『名義抄』。

55) *tipis/*ma(N)-tipis（PMP）「細い」> tipis（Mal）: (ma)nipis（Nga）: nipís（Tag）: tify/nify（Mad）: (ma)nifi（Sam）: (ma)nifi（Ton）。

古日 *tifi- > 上日　チヒ - さい「知比佐伊＝小さい」『新撰字鏡』，チヒ - さ / チイ - さし「小」『名義抄』。

平安前期の『新撰字鏡』はイ音便形を記す。また歴史的仮名遣いはチヒが正しいが，『名義抄』には混乱がみられる。

56) *tuwa/*tuqa（PMP）「老いた，熟達した」> tua（Mal）: (ma)tua（Tob）: (ma)toa「兄姉」（Mad）: tua「祖父（呼称）」（Fij）: (ma)tua「親」（Sam）: (ma)tu'a（Ton）。

古日 *tuwa > 上日　ツハ - もの「兵，武，戎」『名義抄』。

上日においてツワの単独例はないが，ものは「者，物」であることは明らかである。辞書では副次的意味とする「信頼できる人，自分の所信を曲げない人，強情な人」が原義を保ち，『古事記』，『日本書紀』で「兵，兵戎」はその当て字とともに派生した意味であると考えられる。ツハ - はワ行と混乱した表記である。

さらに語頭では 01) *taŋan, 11) *tanəh, 22) *daRi, 23) *duRuq, 47) *tapis, 48) *timbun, 語中では 19) *Ratus, 29) *qituŋ, 40) *butuq, 41) *patay, 71) *pa(n)daŋ を参照。

VI（*k/*g ; *-ŋ-/*-ŋk-/*-ŋg-（語中）> *k）への変化例：

57) *gigi（PWMP）「歯」> gigi（Mal）: gigi（Tob）: hihy「歯肉」（Mad）。

古日 *kii > 上日　キ - かみ「牙喫み」『万葉集』（9: 1809），キ / キハ「牙」『名義

抄』。

『万葉集』で牙をキと読ませて居るのは，後世の訓読みであることは言うまでもない。この例は，筆者の 1 群（または 2 群）に当たり『名義抄』の声点では低平調のキーと記される。現代京都方言にこの言葉が残っていれば語末音節が高くなるはずである。この語源説は村山（1973）がすでに述べているが妥当である。

58) *gilaŋ（PMP）「輝く」> gilang（Mal）: gilang（Jav）: ʻila（Sam）: ki-kila（Ton）。
古日 *kira- > 上日　キラ / キラ - ら「岐良良＝雲母」『和名抄』，キラキラ / ギラギラ - し「伎良伎良之」『金光明最勝王経音義』，キラキラ - し「支良支良志＝嬐，娸，妍」『新撰字鏡』，キラキラ - し「潔」『名義抄』。

59) *girik（PWMP）「穿つ」> gerek/girek（Mal）: girik（Tob）: girik (Nga) : hirika「孔」（Mad）。
古日 *kiri > 上日　キリ「吉利＝錐」『正倉院文書供養料雑物進上啓』，「吉利」『新撰字鏡』，キリ「錐，鑽」『名義抄』。

60) *guluŋ（PWMP）「転がる」> gulung（Mal）: gulong（Tag）: holona/horona（Mad）。
古日 *kuru- > 上日　クル - ま「久流末＝車」『正倉院文書万葉仮名文』，クル - ま「車」『名義抄』。
船より車の発達は遅れたようである（『時国辞』）。語末の - まは語源不明。古日 *kuru- は現代語の「コロ（転）ぶ，コロ（転）がる」の語源ともなった可能性がある。

61) *kilat（PWMP）「稲光」> kilat（Mal）: kilat（Nga）: kidlát（Tag）: helatra（Mad）。
古日 *kira > 上日　キラ - めき『宇津保物語』，キラ - めかす『宇津保物語』。
『日国辞』がキラを擬態語と断定的に述べているのは誤りである。なお，PWMP *kilap/*gilap も語末子音が異なるだけで「輝き」を意味するが（Dempwolff は *kilat の二次形とする），古日はこの形のどちらを継承したのか決定できない。

62) *kusa（PWMP）「イネ科の種類，雑草」> kusa-kusa「インドヒエ（イネ科）」(*Echinochloa colona*)（Mal）: kuse(n)「ハスノハカズラ（ツヅラフジ科）」(*Stephania japonica*)（Iba）: hosa(na)「ベロジア科の種類」(*Xerophyta dasylirioides/X. eglandulosa/X. pinifolia*)（Mad）。
古日 *kusa > 上日　クサ「久佐＝草」『万葉集』（5: 886），「久佐＝草」『和名抄』，クサ「草，卉，種」『名義抄』。
インドヒエは水田の雑草，ハスノハカズラは蔓草，ベロジア科は固い繊維をもつ単子葉の草本で岩場に生える雑草である。クサ「草」について村山（1988）は

河野六郎説に従い中期朝鮮語 *kuč「花」がクサの語源とみる。サを tsa と解釈するのは河野説および有坂秀世説に依ったためであるが（朝鮮語末は *č であって *ča ではない。上日の語末の a とは何か。また *č の対応語例があまりにも少ない），10 世紀以降という中期朝鮮語の時期的新しさによる時代錯誤（古日で「草」は何と呼ばれていたか），そして一層問題となるのは唐突な意味変化である。諸言語間で草と花が意味的対応（変化）するような例がほかにもあるのだろうか。筆者は朝鮮語語源説に疑問を抱かざるを得ない。また有坂の字音研究の圏外となる 5 世紀以前にサが tsa であったという何の確証もない。村山（1988）も日本語最古の記録である稲荷山鉄剣銘（471）ではサ行子音が ts とも s とも書かれていることを指摘しているから，日本語史における ts は単なるグラフィ上の現象であったことも考えられる。村山が *kuč 説を受け入れることは上日のサ行音に多重対応を認めることになる。橋本（1950b）はサ行子音の決定が困難であると指摘し，軽々に ts やその他の子音とみる解釈を戒める。比較言語学的には *sa を含む *s 音は古日から現代に至るまで途中で脇道にそれることなく首尾一貫していたと考えられる。

さらに語頭では 05) *kaən, 14) *kahuy, 44) *kapis, 45) *kupas, 85) *gəlap, 語中では 15) *ikan, 16)*taŋis, 18) *Rakit, 32) *ləkət, 36) *bukid, 37) *bu(ŋ)kul, 49) *dakəp, 50) *dəkət, 51) *ţakţak, 52) *taŋga, 67) *wakaq, 79) *aŋin, 86) *a(ŋ)kat, また *-ŋg- の有声音化について 3.3 v) を参照。

VII（*c, *j, *s, *z, *Z > *s）への変化例：

63) *Zilaq「舌」（PAN）> j-m-ilaq「嘗める」（Pai）: dila（Tob）: jela（Nga）: dilah「炎」（Jav）: díla?（Tag）。

古日 *sira/*sita > 上日　シタ「之多＝舌」『和名抄』，シタ「舌，簧」『名義抄』。

この祖語形は Demwolff が PWMP *dilah「舌」，*dilap/*dilat「嘗める」と再構成した形を Dahl（1976）が修正したものである。上日における語中の *-r- から -t- への変化は例外であるが，変則的なロータシズムの一種とも考えられる。ただし，Dahl は一方で *l_1id_3aq (PAN)「舌」を lidah（Mal）: liḍah（Jav）: liḍaliḍ（Pai）の対応から再構成しているから，古日に由来したのは *Zilaq とこの形との混合形 *Zidaq であった可能性も排除できない。シタは上代から使い続けられていたが，幼児語のベロが近畿から広まり，現在，方言地理的に両形は複雑な分布を示す（『日国辞』）。

その他，語頭の *s については 46) *supsup, 74) *sabaq, 76) *suwan, 84) *sinaR, 語中の *s, *c, *j については 13) *əsuŋ, 27) *qasap, 35) *ucap, 43) *pusəj, 62) *kusa, 72) *pajay を参照。

VIII（*m > *m）への変化例：

語頭では 02) *mata, 25) *maRi, 接頭辞の 38) ma(N)-bulat, 語中では 08) *kaməy, 10) *inum, 21) *Rumaq, 75) *Səmay を参照。

IX（*n, * ɲ > *n）への変化例：

64) *ɲamɲam（PMP）「味わう」> namnam（Tob）: namnám（Tag）: ñamñam（Chmr）: nana（Sa’a）。

古日 *nama-i > 上日　ナメ（namë）（連用形），ナム「奈武＝嘗」『万葉集』（8: 1635），ナム「奈牟＝啜」『新撰字鏡』，ナム「啜，嘗，飲，飡」『名義抄』。

本祖語形は Blust（1989）による。嘗めるの意味は「味をみる，味わう」が原義であり「舌先で物にさわる」が本義（『日国辞』）となるのはその後の変化である。メは乙類。

65) *buŋay/*biŋay（PWMP）「ブニノキ（ミカンソウ科ヤマヒハツ属）」（*Antidesma bunius*）> buni（Mal）: bugnay/bignay（Tag）: vona（Mad）「ヤマヒハツ属の一種」(*A. petiolare*)。

ブナ科のブナ（*Fagus crenata*）は『名語記』（1275）に記載があるが，古日はフナであったと推定される。ブナ / フナとブニノキはともに落葉高木であるが，前者が温帯域，後者が熱帯域の樹木で相補的分布をする。果実が食用となり樹皮が染料や薬用として利用されるが，木材は下等とされるなどの共通点がある。祖語音の *ɲ が *n に変化したのは，接触したアルタイ系言語（ツングース諸語）の音体系に *ɲ がなかったため（池上 2000）と推定される。開拗音（ニャ）は，平安以降，漢語から借用されるまで日本語には存在しなかった。ただし，母音変化において *-ɲay が乙類の *-në にならなかった理由は不明である。

66) *ni「属格小辞」，*na「連結（同格）小辞」（PAN）> 古日 *ni, *na（二次形 *no）。

2.1 iv) で述べたように，古日においてオーストロネシア語族から受け入れた文法的要素のうち接尾辞については *-i 以外にないとみられるが，文法的小辞としては本項目が古日を経て，それぞれ，上日の多機能の助詞ニ，ナに継承されていると考えられる。ナについては 2.1 i) でもふれたが，ni については，フィジ語

で bilo ni tī「茶の器＝茶碗」のように属格，パラオ語では *ni の規則的変化形 el[əl] が cherm-ek[ʔərmek] el bilis「私の飼っている犬（私の犬）」のように同格小辞，古ジャワ語では warṇa ni-ng kuda「馬における色（馬の色）」が「詩歌に巧み，糸竹に妙」『徒然草』（1331）の「に」にもみられる対象を指す属格的機能をもつ。また受動表現の行為者を表すタガログ語の ni は b-in-ilí ni Joan「ジョンに（よって）買われた」，マダガスカル語の ny[ni] は a-petraky ny vahiny「客に座られた」のように上日の「か行けば人爾厭はえ，かく行けば人爾憎まえ」『万葉集』（5: 804）の「爾＝に」の用法と同じになる。またマダガスカル語で *na は音変化で ny となるため *ni とホモニムになり vahin’ ny reni-ko「私の母の客」のように属格用法ともなる。なお，タガログ語の ni は人称冠詞主題形 si（人称冠詞）の斜格形である。この人称冠詞属格の ni は台湾諸語（アミ語，サイシヤット語，パイワン語，プユマ語，ヤミ語など）でも見出される。タガログ語 si はオーストロネシア系三人称複数人称接辞（人称代名詞）の *si/*siDa に由来する形であるが，上日において人称接辞イ -（単数）: シ -（複数）として継承されている（崎山 1990; 2001）。その属格小辞のニも日本語に存在することは，日本語の混合的特徴を判断するうえでの重要な徴候ということができる。

その他の *n の変化について語頭では 16) *maN-taŋis > *ma-naŋis に由来する *naki, 53) *maN-tənun > *ma-nənun に由来する *nunu, 語中では 11) *tanəh, 42) *punay, 70) *inay, 84) *sinaR を参照。

X（*w > *w）への変化例：

67) *wakaq（PMP）「割る」> wakaʔ（Mano）: waʔa（Sa’a）。

古日 *waka-i > 上日　ワケ（wakë）（連用形）「和気＝分け」『万葉集』（20: 4297），禾 - く「分，班，別」『名義抄』。

ケは乙類。

68) *iwak（PMP）「魚」> iwa（Jav）: (fa)iva「魚釣り」（Sam）。

古日 *iwa- > 上日 iwa イワ - し「伊和志＝鰯」『平城宮址木簡』，イハシ / イ◯シ「鰯」『名義抄』。

本項目の *iwak は 15) *ikan「魚」とシノニムになるが分布に地域差が存在する。

イワ - に対するイヲ - さ「伊乎佐＝魚矢」『万葉集』（20: 4430），イヲ「魚＝伊乎」『和名抄』は -a/-o の母音交替例とみることができる。イワシの語源をイヲヨワシ「魚

弱」とみる説があるが，イヲ - の部分は良いといしてもヨワシが正しいかどうかは分からない。- シは形容詞の語尾であるからイヲアヲシ，イヲヤスシとでもなんとでも言える。まあたイヲ - さの - さは矢の古語としつつ「忌小矢」とする音義説まがい（『時国辞』）はいただけない。『名義抄』がイハシ，イワシと両形を記すのはハ行転呼音の逆の誤記ないし混乱例である。イヲ - さの歴史的仮名遣いをイホ - さと解する（東京堂『国語学大辞典』「ハ行転呼音」の項）のはこの混乱に影響されたのであろう。なお，3.3 i) を参照。

さらに語頭では 09) *tuwak, 77) *wuru，語中では 33) *luwaq, 56) *tuwa, 76) *suwan, 78) *zawa, 87) *awaŋ を参照。

XI（*y > *y）への変化例：

PAN（PMP）において語頭に *y- をもつ形は大変少ない。73) *i-qənay は接頭辞を伴う形でこの例とならない。語中では 31) *layu, 83) *puyu を参照。

XII への説明：

母音の変化例は前出の各例から明らかになっているから個々について再説しない。図 1 は，日野（2003）が従来の所説を比較しながら日本語内部の内的再構成によって日本祖語（＝古日）から奈良中央方言（＝上日）への母音変化をまとめたものである。

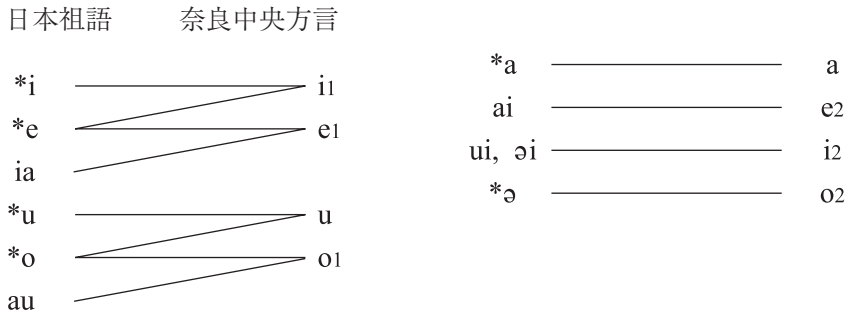


図 1　日本祖語から上代日本語への母音変化（日野 2003）

母音記号右の数字 1，2 はそれぞれ，甲類，乙類を意味する。またアステリスクがついていないものは，上日の語中で起こる変化，すなわち日野の注記によれば ia は saki-ari > sakeri「咲けり」，au は kura-u > kuro「黒」，ai は taka-iti > takëti「高市」，ui は kamui > kamï「神」となる。しかし，この語例において kura- に付く -u とは何か

（接尾辞 ?），kamui という形はどこから得たか（kamï を導くための作為 ?）など不可解な点もある。4 母音しかない PAN から古日への関与を検証すると，ui/əi に対し PAN（PMP/PMWP）の 06) *apuy「火」> fəi > ヒー（乙類），07) *babuy「猪」> *fa(f/w)uy > wəi ヒー（ヰー），14) *kahuy「木」> kəi > キー（乙類）などが指摘でき，これらは同時に PAN の語源としての正当性を証明する。また語頭の *ə は 20)*Rəbi「宵」> yofi > yöhi ヨヒ，73) *qənay「砂」> yonë > yönë ヨネのように o に変化する。ただし，図 1 にある *ə > ö に対し PAN からは例証ができない。例は少ないが，*au は *tawu「人」> *tau > - ト（tö）のように ö に変化する。82) *paRi の補足説明を参照。また *a-i, *u-i/ *ə-i の接尾辞 -i は PAN 系で乙類母音を発生させることを 2.1 iv) で指摘した。

3　いくつかの民俗語彙例

次に意味的集合をなすいくつかの民俗語彙について PAN 系語源の日本語を示す。このほかにも人称代名詞，地名，植物名についてはそれぞれ，崎山（1990; 1993; 2008）を参照せよ。

3.1　イネ関連

69) *bəRas（PWMP）「コメ（脱穀した穀物）」/ vrīhí（サンスクリット語）（?）/ ’bras（チベット語）（?）> bəras（Mal）: boras（Tob）: behas（Nga）: bigás（Tag）: (a)byás（Kap）: brah（Cham）: pugas（Chmr）。
古日 *fiya > 上日 *hiya-i > ヒエ (hiyë)「比要＝稗」『万葉集』（12: 2999），ヒエ「比衣＝稗」『和名抄』，ヒエ「稗」『名義抄』。

本項目に関連して，ウルチ「粳」のサンスクリット語説，マレー語説はともに大変疑わしい。またサンスクリット語，チベット語は PWMP と音形，語形が似るが借用を含めその関係は不明である。一方，ヒエの語源はこれまで知られていない。中国語の稗（上古中国語 *b’ĕg）とも結びつかない。『牧野新日本植物圖鑑』は「盛んに茂るから日得，または稗の字音に補音エ」と述べるが，いずれもこじつけである。イネ科のヒエ（*Echinochloa esculenta*）は縄文時代から栽培化が始まっていたとされる（吉崎 1997）が，日本列島に渡来したオーストロネシア民族は列島で主要穀物であったヒエをコメとみなしたのである。ヒエが主流穀物であったことは，その後もイネ科であるが別属の雑穀類にシコクビエ（*Eleusine coracana*）やトウジンビエ（*Pennisetum typhoideum*）のようにヒエという名を付

したことからも分かる。注目すべきは，タガログ語 bigás はコメを含む脱穀した穀物全般を指すことで，それが古日の段階でもすでに現れていたとすれば，意味変化への理解が一層容易になる。ヒエの PAN 語源は規則的な音変化から証明される。語末に付いた -i は属格接尾辞，また万葉仮名の要はヤ行のエを表すから（橋本 1949b），歴史的仮名遣いがヒヘとならないのは正当である。ただし，『和名抄』の衣はア行のエを表すが，平安初期（村上天皇の頃）にヤ行のエはア行のエと同音になったためである。

70) *inay（フィリピン祖語）「イネ（熱帯ジャポニカ ?）」> ene（Bat）: (ay-)inay（Mang）。「ススキ属の一種（イネ科）」(*Miscanthus floridulus*) は，現在，屋根葺き材とする。

古日 *inai > 上日　イネ (inĕ)「伊禰＝稲」『万葉集』（14: 3459）のネは乙類か。

現在は意味変化しているが，この語形は Madulid（2001）による。いずれもミンドロ島の言語であるが，他の地域からの資料がないため局地的な祖語形に留めざるを得ない。フィリピン・ルソン島北部のカガヤン渓谷のアンダラヤンで出土した土器に籾殻が混和材として使用され，炭化した籾殻から年代測定の結果，縄文後期に当たる紀元前 1,700 年と判明した（Snow et al. 1986）。またほぼ同じ頃，紀元前 2,000 年に台湾の墾丁（K’en-ting）遺跡があり，紀元前 3,000 年以降のマライ・ポリネシア民族の日本列島への移動時期にもっとも近い。またフィリピンからマリアナ諸島にも稲作を伴った民族移動があり，現在のチャモロ語の母体を形成するとともに，紀元前 1,500 年以降のマリアナ赤色土器に米粒の圧痕を残した。このような事実は日本のイネの起源地が長江流域とはかならずしも限らないことを意味する。

71) *pa(n)daŋ（PWMP）「平野」> padang（Mal）: padang（Tob）: padang（Nga）: parang「草地」（Tag）: fandra/fatrana（Mad）。

上日　ハタ - け「波多気＝畠」『万葉集』（18: 4122），やき - ハタ「夜岐波太＝火田」『和名抄』，ハタ / やき - ハタ「畷」・ハタ - け「白田」『名義抄』。

ハタ - け（乙類）の語末要素 - けは語源不明。なお，国語辞書ではハタ，ハタケともに同じ字「畑，畠」を与えるが（『日国辞』），ハタ「畑」は字面からも明らかなように，本来，焼畑の行われたところでハタ - け「畠」とは区別されていた。

72) *pajay/*pajəy（PAN）「イネ」（*Oryza sativa*）> panay（Ami）: paday（Pai）: pazay（Paz）: padi（Mal）: parei（Nga）: palay（Tag）: fa’i（Chmr）: padai/dei（Cham）:

thaai[21]（回）: fary「サトウキビ（イネ科）」（Mad）。

この祖語形は規則的に音変化すれば古日の *fasai は上日で ハセ / ハゼとなり，ウルシ科のハゼに変化するようにみえるが，ハゼにはイネとの関連を示唆するような何の共通点もないから無関係である。しかし，古日の *fasai が上日でハセ（hasë）と変化した後，さらにワセと混乱した可能性を否定できない資料がある。ハ行転呼音は原則的に語中でしか起こらないとされているが，語頭でも現れることがある。ワシ -「斯多備袁和志勢＝下樋を走せ」『古事記』（下・允恭），「和斯里底＝走りで」『日本書紀』（雄略 6）におけるワシ -「和志，和斯」はハシ -（走）の転呼音であることが明らかである。これを論外とする（『時国辞』「上代語概説・子音」）か，まったく別の言葉として扱うか（『日国辞』）国語学上でも統一がない。本項目から論外説に重要な一石を投じたい。上日ハセはハシ -/ ワシ - と同じ混乱を被り，ワセに変化するとともにイネの早く成熟する種「和世＝早稲」『万葉集』（14: 3386），禾セ「稉」『名義抄』を意味するようになった。ワセはワサの変化した語（『日国辞』）というのは根拠を欠く。

73) *qənay（PWMP）「砂利」> òné（Gay）: ěnne（San）: unai（Chmr）。
古日 *i-onai > 上日　ヨネ（yönë）「与禰＝穀実」『和名抄』，ヨネ「米」/ いね - の - ヨネ「稲米」/ もち - の - ヨネ「粳米」/ ましらけ - の - ヨネ「繋」/ ヨネ - の - もやし「蘖」『名義抄』。

語頭の *i- は場所指示の接頭辞でもとは「砂のあるところ＝砂地」を意味した。イ - さわ「沢」，イ - の「野」，イ - やま「山」，イ - わ「廻」などの地名にもその痕跡がある。ネは乙類でヨの乙類は逆行同化によると考えられる。ヨネについて「ヨネ　米のこと，又砂をもヨネといふ事有，元三の旦内裏の御庭に砂を置くをヨネまくといふなり」と古琉球語辞書『混効験集』（1711）にある。現在の沖縄に多い地名，与那国，与那嶺，与那原などの与那 - はすべて「砂」を意味したと考えられる。与那を琉球語ユーナ「オオハマボウ」（*Hibiscus tiliaceus*）や上日　ユウ「木綿」（「由布＝木綿」『名義抄』）とみる説（伊波 1975）は音変化のみならずその植生からも受け入れがたい。熊本・阿蘇でユナは「火山灰」のことであるが，地名ヨネは日本海側に広く分布し「砂地」を意味する。ただし，桐生市菱町の米沢（ヨネざわ）もヨネは砂のこと（島田 2000）。砂には小粒，大粒があり（上日にはイサゴ，マサゴ＝細砂という語があった），後者は現在，砂利と呼ばれるが（英語では sand, gravel で区別する），新しく渡来した米粒を砂粒に見立てる意味変化がニューギニア島のオセアニア諸語のトバティ語 xiš「砂＝米」

でも起こっている。ヨネの辞書における冒頭の語義「脱穀した稲の種子」を鵜呑みにする Vovin（1994）はその論述にも偏向した影響を与えている。

74) *sabaq（PMP）「灌漑した田畑」> sawah「水田」（Mal）: saba（Tob）: (ma) nyawa(an)（Nga）: cava「収穫期」（Fij）。
古日 *safa > 上日　なる - サハ「奈流佐波＝鳴沢」『万葉集』（14: 3358），サハ「佐波＝澤」『和名抄』。

この祖語形に対し Dempwolff は対応例に含めていないが，特殊な意味変化をしたタガログ語ほかの sawá「水田に生息する大ヘビ（bor constrictor）」がある。現在は捕食し，生薬，皮革としても利用されるが，もとは「水田の主」から転じたと考えられ，ミヅチ「虬」に似た発想である。なお，現代語のサワに対するサハという歴史的仮名遣いは正当である。

75) *Səmay（PAN）「調理したコメ」> həmái（Ami）: sumái（Paz）: imai（Mal）: humáy（Akl）: glmay（Sub）。
古日 *komai > 上日　コメ（kömë）「渠梅＝米」『日本書紀』（皇極 2），やき - コメ「也岐古米＝糯米」『和名抄』，コメ - さき「糠」『名義抄』。

77) *wuru も同じ意味であるが，台湾における変種と考えられる。コ，メともに乙類。コは乙類のメに逆行的に母音調和したものか。本祖語形は Blust（1976）による。しかし，Madulid（2001）にはフィリピンにおけるイネの対応語彙として ammay（Atta）: humay（Bisayan, Bukidnon）: umay（Kalagan）: homay（Mamanwa）: may（Sangil）, および本稿の略号による omay（Mano）: ime（San）が収録されている。筆者はこれらの比較から *qəmay（PWMP）を再構成し意味も「イネ」とすべきと考える。Blust の祖語形はその意味とともに対応語彙の見直しが必要である。なお *qəmay からも古日の語頭子音 *k- の説明ができない。フィリピンでは 72) *pajay 系とこの *qəmay 系が折半し分布するが（さらに 69) *bəRas がイネになっている地域もある），この違いがイネの何の区別に対応するのか不明である。

76) *suwan（PMP）「堀棒」> suwan（Jav）: suan「植える」（Tob）: sua「突く」（Fij）: sua「掘る」（Sam）: huo「斧」（Ton）。
古日 *suwa-i > 上日　スヱ (suwë)（連用形）「須恵＝据え」『万葉集』（2: 202），ウヱ（uwë）「宇恵＝植え」『古事記』（中・歌謡）に対しその意味的連関を証明する用例がある。

中臣朝臣宅守「世の中の常の道理（ことわり）かくさまになり来にけらし　スヱし（＝ウヱし）種から」『万葉集』（15: 3761）。

は「植え」は「据え」から変化したことを物語る。いずれも下二段連用形で乙類である。スヱ，ウヱという歴史的仮名遣いは正当である。語頭子音 s- の脱落については，サル「然有」（saru）/ アル（aru），シネ「之禰」『和名抄』/ イネなどへの類推が考えられる。

77) *wuru（台湾ツオウ祖語）「調理したコメ」> 上日　ウル - いね > ウル - しね（宇留之禰＝粳米）『本草和名』，ウル - しね「粳（しいな）」『名義抄』。

台湾で栽培される水稲品種はほとんどがウルチ米で日本時代には蓬莱米と呼ばれた。*wuru は李壬癸（1972）による再構形であるが，大正の日本時代に日本語から借用されたとは考えにくい。日本語ではウルチ，ウルシネと呼ばれたからである。なお，69) *bəRas を参照。

78) *zawa（PWMP）「雑穀類」‘millet’ > jaba（Tob）: dawaʔ「コアワ（イネ科）」（*Setaria italica*）（Tag）/dawa-dawa「ヒエ（イネ科）」（Tag）: davy「タデ属の一種（タデ科）」（*Polygonum senegalense*）（Mad）。

*zawa にはサンスクリット語（yawa-, むしろプラークリット語 java-）語源説があるが，この説に否定的なのは Blust（1976），Tsuchida（1977）で，台湾ではすでに古くからアワは栽培されていたが，当時はまだサンスクリット語の影響はないという根拠による。確かに PWMP にサンスクリット語の借用が始まるのは早くても西暦以降である。しかし，既存のものを後に外来語で呼んでも語彙史として問題にならないことは，ビャクダン（*Santalum album*），ニクズク（*Myristica fragrans*）などが東インドネシア・マルク諸島の原産であるにもかかわらず，マレー語 cendana, pala はサンスクリット語借用語であることからも分かる。ただし，ここでは両見解に従う。したがって，上日のアハ「阿波＝粟」『万葉集』（14: 3364），アハ「阿波」『新撰字鏡』，アハ「粟」『名義抄』には歴史的仮名遣いの混乱が指摘できる。ただし，祖語形の語頭子音 *z- は古日で *s- に変化するが（法則 VII），74) *sabaq に由来するサハとの衝突を避けるため *s- の脱落が起こったとも考えられる。なお，『名義抄』の声点ではアハ（低高），サハ（高高）で異なる。

3.2　風・方位

79) *aŋin/*qaŋin（PMP）「風」> angin（Mal）: angin（Tob）: angin（Nga）: hangin（Tag）: ngin/angin（Cham）: ŋin[33]（回）: anina（Mad）: (c)agi[ðaŋi]（Fij）: agi[aŋi]「吹く」（Sam）: agi（Ton）。

古日 *aki > 上日　アキ「安吉＝秋」『万葉集』（15: 3688），アキ / アギ「安伎」『万葉集』（15: 3629），アキ「秋」『名義抄』。

秋（旧暦）は，さわやかな風，台風，木枯らしなど風の種類がもっとも多様であるとされる。夏とは異なる秋の風に対する平安初期の歌人，藤原敏行の鋭い観察「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」『古今和歌集』，また松尾芭蕉の「あかあかと日はつれなくも秋の風」『奥の細道』（1702）も風によって秋が知られるという趣旨である。現代においても，著名なエッセイストが「秋風というのは風の中でも特別製のいい風で，風が渡っていくのが目に見えるような気がする」『東海林さだおの弁当箱』（朝日新聞社 1995）と書くのも日本人の抱く「秋＝風」の感覚を代弁している。しかし，古代人は季節の推移と風の関係について現代人よりも一層敏感に反応したと思われる。そして突風が吹き始めると季節の認識が変わる。83) *puyu を参照。

80) *baRat/*qabaRat（PMP）「北西モンスーン，強風，西」> barat（Mal）: barat（Nga）: (ha)bagat「南風」（Tag）: (a)varatra「北」（Mad）: (c)ava「嵐」（Fij）: afā「嵐」（Sam）: afā（Ton）。

典型的な熱帯性気候では平均して 11 月から 3 月までが雨期となり，連日，スコールが降り（北）西風が強い。古日にはこの言葉が疾風の意味で残った。

古日 *faya > 上日　ハヤ - ち「波夜知＝暴風」『和名抄』，ハヤ - ち「暴風」『名義抄』のほか，

> ハヤ - ても龍の吹かする也。ハヤ - 神に祈りたまへ『竹取物語』

で明らかなように，上日では祖語形そのままのハヤとしても用いられている。ハヤは福岡，佐賀，長崎で「春夏に吹く強く暖かい風」を指すが（関口 1985），ハヤ - ては滋賀の高島，沖の島では「二, 三月に北西から吹き湖上で遭難が多い風」を言う（青柳 1999）。国語辞典で - てをわざわざ「風」の意味とする根拠は何か。追手，行く手，仕手などの手と同じで方向を表す語とみて何ら問題はない。

81) *bəRu/*baqəRu/*qaRu（PAN）「新しい」> vaqu(an)（Pai）: baharu/baru（Mal）:

bahu(a)（Nga）: bago（Tag）: báyu（Kap）: vaovao（Mad）: vou（Fij）: fou（Sam）: fo'ou（Ton）。

古日 *ayu > 上日　アユ「安由乃可是＝アユの風」『万葉集』(17: 4006; 17: 4017)。

アユ - の - かぜは「東北風＝豊漁をもたらす風」（室山 2001）であるが，「くさぐさの珍らかなる物を渚に向かって吹き寄せた」風（柳田 1978）であることも，季節の始めに初物をもたらす「新しい」風という命名に相応しい。

82) *paRi（PMP）「ガンギエイ科，南十字星」（Rajidae）> pari（Mal）: pare（Tob）: pahi（Nga）: pagi（Tag）: fay（Mad）: vai（Fij）: fai（Sam）: fai（Ton）。

古日 *fayi > 上日　ハイ (hayi) / ハヰ「南，南風」。

古代日本語では母音の重複を避ける傾向があったことが知られている（濱田 1946; 橋本 1950b）。したがって，平安初期にハイとなったためハヤ，ハエ（haye）が二次形として現れた。なお，小刀を意味するサヒ「佐比＝鉏」『播磨国風土記』，「差比」『日本書紀』（推古 20）がサイに変化したため（サイ - つゑ「鏄」『名義抄』）二次形サエ（saye）が現れたという説明は，サエにサヘ「裟陛」『日本書紀』（斉明 5）と書かれた例があり，この語との関係が問題になる。22) *daRi にも同じ傾向を示唆する資料がある。しかし，25) *maRi にこの転韻現象が起こらなかったのは，*-Ri > -yi が表記上でワ行のヰ（wi）と混乱したためと考えられる。ただし，平安初期にヰはイと同音になる。時代は下がるが，「隼人」に対しハヰトと書かれた江戸中期の『書言字考節用集』（1717）の注釈がそれを裏付ける。なお，ハヰトの - トは *tawu（PMP）> *tau に由来し「人」の後部要素の - ト（乙類）と対応する。ヒト「比苔，比等」『日本書紀』（歌謡）の前部要素ヒ - は甲類でヒト「人」は語源的に複合語である（『時国辞』）。

マライ・ポリネシア民族にとって南十字星（正確には菱形をした星座）は南極を認識するための，北半球では北極星に相当する定点となるが，その形から魚のガンギエイ科に見立てたのである。ただし，ミクロネシアでは同じく菱形のオキハギ（*Abalistes stellatus*）とみなすが名称は異なる。海面から跳躍しふたたび海中に没するように見えるのは，この星座が南極を中心に一日一回転するためである。しかし，日本列島からは南十字星は見えない。意味変化の結果，ハイ，ハエは琉球で南，南風を意味し，西日本にかけて広く分布するが，富山（東砺波）の「お - ハイ - かぜ＝激しく吹く風」と志摩半島の「黒 - ハエ，白 - ハエ＝梅雨の前後に吹く南東季節風」の南北線をもって本土の東限とする（崎山 1993）。ただし，黒潮に沿って静岡，伊豆諸島の一部まで広がるが，岩手・宮古のハイ「強くて出

漁不能の風」（関口 1985）はこの分布域から外れ例外的である。このハイの分布が 73) ヨネの分布と重なる点に注目したい。

83) *puyu（PMP）「突風」> puyu（Mal）: puyó?（Tag）: vucu(ka)「叩き付ける」（Fij）。古日 *fuyu > 上日　フユ「布由 = フユ」『古事記』（中），「布由」『万葉集』（17: 4003），フユ - ねき「冬葱」『名義抄』。

岡山・日生（ひなせ）には冬，正月の「七日に船出すな」という諺があり，その日の突風が恐れられる（http://www.hinase-my6893.com/weather/weather.html）。鹿児島・阿久根では冬になるとアガイ「上い」風という台風並の西からの突風が吹き荒れる（http://www.city.akune.kagoshima.jp/rekisi/mukashi.html）。東京・八丈島大賀郷のフユニシは 11 月中旬から 3 月上旬に吹き荒れる風，愛知・篠木のフユオコシは夜，南風が強く吹いたあと大雪を降らす風（関口 1985）である。これらの風名に含まれるフユはもと突風を意味したと考えるほうが自然である。なお，フユ = ヒユ（冷ゆ）説があるが，下二段ヒユは連用形ヒエがより古形であり母音が前後ともに一致しないし，そのような母音交替法則も知られない。

3.3　色彩

色彩名称について「白，黒，赤，青」は日本固有の色名と言われるが，最初は色名ではなかったことが語彙の比較から判明する。また語根から派生語が体系的に生まれる仕組みが認められる。古日において第 1 ステージで基本的な 4 色が存在したことは，チベット語色彩語彙と同じである（長野 1982）。

	-a/-o[i]	-a/(a-i>) –ë[ii]
84) *sinaR[iii] PMP）/ *silak（PWMP）「光」>	シラ「白」[iv] / シロ「白」/	—
85) *gəlap（PWMP）「闇」>	クラ「暗」 / クロ「黒」	/ クレ「暮」
86) *a(ŋ)kat[v]（PMP）「昇り」>	アカ「赤，明」 /	— / アケ「朱，開，明」
87) *awaŋ（PMP）「中空」>	アワ（アハ）「淡」[vi] / アヲ「青」 /	—

i)　-a/-o の母音交替について上日においてこの交替が文法的にどのような機能を表したのか明らかでない。86) においてアカに対するアコという形ができない理由も不明である。しかし，本項目の 84), 85), 87) 以外にも 27) *qasap「煙」に由来するアソ「阿曾 = 阿蘇」『和名抄』は同じ交替によるとみられる。また 34) *ulaR「蛇」，68) *iwak「魚」にもその交替形がある。

ii)　2.1 iv) ですでに述べたように，交替形 -a/(-a-i>) -ë は上日　タカ「高」/ タケ

「嶽，竹」，アマ「甘」/ アメ「飴」，ムラ「叢」- がる / ムレ「群」，アマ「天」/ アメ「雨」にも認められる。このような意味変化のうち，アマ「天」/ アメ「雨」の交替例はニューギニア島北方のオセアニア諸語アドミラルティー諸島語間でもみられ，タカ / タケという交替は 52) *tiŋgi「高い」がマダガスカル語で tsingy「山頂，突出部」と変化する例によっても支持される。また下二段の連用形を派生し乙類母音となる。クレ，アケはその例である。また連用形が名詞としても用いられる伝統は現在まで継承されている。ただし，シレ，アヱという形ができない理由は不明であるが，アヱについてはアヰ「阿井＝藍」『和名抄』がアヱから変化した語であるとも考えられる。

iii) 上日でシナは，片岡山の枕詞としてシナてる「斯那提流」『日本書紀』（推古 21）と用いられるが，その意味について「断層状になった山の片面に日が当たっているから」『日国辞』という解釈は説得性がある。ただし，シナは「志那都比古神」『古事記』（上）で風神，現在，滋賀・草津の志那神社でも風神をまつり光と関係がないが，京都・山科の - シナをシノと関連づけ光とみる説がある（吉田 2003）。シノ - の - めは「光の目＝東の空にわずかに明るさがさす刻，東雲」であり，この語は琉球語のシノ「月，太陽＝中空発光体」とも関係する。シノ - はら「篠原」などのシノを「湿地」（楠原ほか 1981），あるいはシナを「土地の様相」(?)『日国辞』とする解釈は不可解である。

iv) 上日でシラ - むは「夜漸くあけ白む程に」『今昔物語』のように「光がさす」ことを意味した。

v) 法則 VI にもかかわらず例外となる場合がある。祖語形 *akat からアカ - とき「安可等吉＝日昇のとき，暁」『万葉集』（15: 3665）に対し語中の前鼻音形 *aŋkat からアガ - り「安我里＝上」『万葉集』（19: 4292）のように無声音・有声音で対立する語（二重語）が生み出された。ただし，アガ - りにはアカ - り「驤＝上」『日本書紀』（雄略 9）（前田本訓）と読まれる例もある。類例では 37) *bu(ŋ)kul におけるフク - る「布久流」が語中で有声音化したフグ - り「布久利＝陰嚢」『和名抄』が，表記の布久 - は同じであるが二重語になる。『宇治拾遺物語』（1221）も「ふぐり」と記す。ただし，有声音化現象として論じるには語例が乏しい。

vi) 上日　アワ「淡」/ アヲ「青」。青は本来，白と黒の中間を示し，時には白，黒もさす（『日国辞』）。アワとアヲは交替形である。アワ - しほ「阿和之保＝白塩」『和名抄』，アワ - しほ「巻塩＝食塩」『摂津国風土記』（逸文），「アワの御ことわり＝淡泊な拒否」『源氏物語』もすべて「淡い」を意味する。

紀貫之「春くれば滝の白糸いかなれやむすべども猶アワに見ゆらん」『拾遺和歌集』（1004番）。

この歌のアワ（古典文庫本）を『日国辞』は「淡」とするが，岩波・新日本古典文学大系本では「泡」と漢字を当てる。貫之の歌のアワは白と対比して色がうすい（淡い）の意味で用いられているから形状の「泡」と読むのは不適当であり，『日国辞』を妥当とすべきである。

そのほか，近江の語源とされるアハ-うみ「淡海，相海」『万葉集』（7: 1350; 12: 3157），アフ-み「阿布彌，阿甫彌，阿符美」『日本書紀』（歌謡）の歴史的仮名遣いにはワ行音との混乱があり，アワ - うみが本来の語源であると考えられる。平均 40 m しかない琵琶湖の湖面は中空の色を反射して鏡のように刻々と変化する。古代人はそれを熟知していたと思われる。

なお，アワの語源となった *awaŋ は awaŋ「中空」（Mal）: awáŋ「空間」（Tag）: avana「虹」（Mad）: yawa「遠く」（Fij）: ava「間」（Sam）のように変化するが，マレー語 awang は述語ともなり，Persetujuan masih di-awang. は「合意できるか，まだ五里霧中」を意味する。この *awaŋ に対し，村山（1973）は「淡」を無視しアヲ「青」への変化だけを考える。歴史的仮名遣いのアハへのこだわりがあったからと推定されるが，アヲは *awaŋ の語末母音からは直接説明できない。また，Blust（1983–1984）は *Rawaŋ（PWMP）「隙間」を基本形としてたて *awaŋ/*lawaŋ を二次形とする。この *Rawaŋ を支持するのはフィリピン諸語の「隙間」（マレー語の kerawang「透かし編み」も対応例に含めるのは理解不能）だけである。しかし，空の真ん中を指す「中空」と「隙間」は意味的に大きな乖離がある。別語とみなすべきであろう。

4 「ハ行転呼音」の問題点

歴史的仮名遣いは江戸前期に契沖が古文献および語源に注意して定めた（橋本 1949a）と言われる。したがって，確とした根拠に基づかないままハ行・ワ行音が決められたことも多いが，その権威は現代にまで影響力を持ち続けていると考えられる。歴史的仮名遣いはすべて仮説である，と言い切ってしまえるかどうかは問題があるが，歴史的にそれを検証する方法論としては比較言語学的手法を用いなければならない。他の言語との比較がほとんど説得力を欠く現状において，PAN（PMP/PWMP）との比較がもっとも有効であると，音法則に基づき筆者は主張するのである。

3.3 vi) で述べたように，ワ行・ハ行間の表記のゆれは，「泡雪」の意味でアハゆき

『源氏物語』と書く例もあり（貫之の同じ歌が他出では「アハにとくらん」とある），古代日本語期から語中のハ行音・ワ行音の間で発音の混乱があり，奈良時代の仮名遣いにおいてもハ行音をワ行音で書き（つまり「ハ行転呼音」），またその逆があるなど仮名遣いに乱れが発生している。そして 72) *pajay においても語頭においてこの現象が発生していた可能性がある。ハハ「母」が室町以前に fafa, fawa と両用に発音されていたと言うが（濱田 1946），室町どころかはるか奈良時代以前からであったと考えざるを得ない。橋本（1950a）は，語中・語尾のハ行音がワ行音と同音になったのは奈良朝にすでにその痕跡がみられると言う。『名義抄』では「粟，淡，泡，沫」に対しすべてアハと書く。したがって，「粟，淡」の歴史的仮名遣いをアハ，「泡」をアワと断定することはできない。なお，『俚言集覧』（1797）は，アワ「淡」はアヲ「青」に通じ白色を表すというが，傾聴すべきである。同じゆれがアハ「阿波＝粟」『万葉集』（14: 3364），アワ「禾＝粟」『大智度論天安 2 年点』についてもみられる。したがって，「淡淡しく」をアハアハしく『宇津保物語』，「淡雪」をアハゆき『古今和歌集』と書くのもハイパーコレクションの例とみられる。国語辞書で「淡」の歴史的仮名遣いをアハと断定するのはアワしほ，アワに，アワの，などの用例を無視していると言わねばならない。

貫之の『土佐日記』には写本間でよみすヱ / よみすへ，うるワし / うるハしのような混用例が多く見出される。『名義抄』では「或いは」に対し，あるいハ，あるいワ（禾）の両形を記す。間投助詞とされるワも係助詞ワと語源は同じであるが，「潜（かづ）きせなワ（和）」『古事記』（中・歌謡）と書かれる一方，係助詞ワは現在もハと書かれる。また格助詞へも実際の発音と異なる仮名遣いの混用例であるが，これは『国語学大辞典』の述べるハ行転呼音の例とはならず，「あたり＝辺」を意味する「へ，べ（辨）」『古事記』（中・歌謡）が語源と考えられる。

本稿では歴史的仮名遣いのいくつかの混乱例を指摘し，ことに発音面での混乱は奈良時代以前から始まっていたことを明らかにした。もとの発音（表記）すら分からないとされるハヲリ / ハホリ「羽織」のような例もあるが，これまで歴史的仮名遣いの根拠は十分な語源的検討に基づくものではなかったことは明らかであり，「語中・語尾にあるハ行の音節がワ行の音に発音せられるようになる現象は顕著でありかつ一般的である」『国語学大辞典』という音声学的に一般化できない理屈が先行していたと思われる。本稿においてオーストロネシア祖語形から語源が明らかになったのは，07) キー「亥，猪」の歴史的仮名遣いはヒーが正しいがキーは混乱であり，20) ヨイ「宵」もヨヒが正しいが貝原益軒がヨキと書くのは混乱であること，逆に，22) タヒ

「鯛」，33) ツハ「唾」，56) ツハ「兵」，87) アハ「淡」は，それぞれ，タイ（タヰ），ツワ，ツワ，アワが歴史的に正しいこと，また，『名義抄』が 30) タウ - る「倒る」の歴史的仮名遣いをタフ - るとともにタウ - る，55) チヒ「小」をチヒとともにチイ，68) イワシ「鰯」をイワシとともにイハシと記すのは同時代における混乱例であり，タフル，チヒ，イワシが正当であること，などを示した。

このように，適切な語源の研究のためには語史的な根拠を欠く歴史的仮名遣いという呪縛から解放されなければならなかったのである。

5　むすびにかえて

本稿で明らかにした語彙面から日本列島における稲作の歴史について簡単に推定する。これまでにもいくつかの稲作伝播論があるが，インドネシア，フィリピン，台湾など熱帯島嶼域に主に分布するブル（bulu「毛」）系イネ（ジャバニカ種の一品種で籾の「芒（野毛）」が長く，遺伝的形質はジャポニカ種に近い）が八重山の在来種の中にも見出され，この品種が南島を北上し，日本本土に達した時期は縄文晩期をさらにさかのぼる時代という渡部（1993）の所説に筆者の推論はかなり近い。紀元前 3,000 年（縄文中期）以降にフィリピン北部（台湾南部）を出発したオーストロネシア民族の分派は，言語としてはすでにマライ・ポリネシア語派的特徴を帯びていた。フィリピン諸語との音変化（例えば，法則 I *R > y），意味変化（例えば，19) *Ratus「百」>「数の多さ」，69) *bəRas「コメ」>「脱穀した穀物」），形態法（例えば，2.1 i）および 66) *na で示した名詞句の構成に現れる同格（連結）小辞 na「な」）の類似なども単なる偶然とは考えにくい。一方で，フィリピン諸語の体系的な接辞法が日本語で衰退し接頭辞を部分的に残すのみとなったのは，冒頭（2）で述べた無声音・有声音の音韻対立の復活とともに，言語接触による結果であると結論せざるを得ない。移民は同時に 70）イネ，71）ハタ，74）サワという言葉も伴っていた。農業生産資源研究所（つくば市）によってイネ（ジャポニカ種）の起源地は長江中・下流域とは限らず，フィリピン，インドネシアにたどれることが遺伝子変異の比較調査から明らかにされた（Izawa et al. 2008）こともこの説明に利する。イネは早熟種（72）ワセ）が区別された可能性がある。しかし，当時，日本列島で主要穀物はヒエであったため，渡航した民族によっても集約的な稲作はまだ行われず，もと米粒をいう言葉も 69）ヒエを指すような変化があった。むしろ日本列島は稲作不適地が多かった（高谷 1990）というのが実態であったろう。また水田をいうサワも浅い湿地帯を指す沢に変化した。

ただし，粗放的な稲作や 12）イモ栽培が行われた畑で用いられた堀棒は 76）スワと呼ばれたが，語史的にはスワが語幹となり「据え，植え」という動詞に派生し現在まで残る。穀物の脱穀には 13）ウスが用いられた。時代は下り弥生時代になると，琉球列島から日本海ルートで大規模な米の移入があった。その起源地がどこかは言葉からは分からない。弥生人はその稲粒を砂粒に見立て 73）ヨネと呼び始めた。米はその後もいくつかのルートで渡来したのであろうが，米（マイ）は同じく琉球列島を経て，この言葉とともにもっとも遅く中国南部（長江中・下流域）から到来した。マイは中国南方音 *miei（中古中国語）の借用語である。しかし，イネ（およびワセ）という言葉が最初期の移民から現在まで維持されてきたのは，彼らの食文化において米は中心的な位置を占め続けていたからに他ならない。

謝　　辞

本稿への複数の査読結果に対し説明の不備を補った。さらに，コメントにできるだけ対応するよう試みた。慎重に査読された各位に深甚の敬意と謝意を表する。本稿の内容の一部には，2011 年 3 月 19 日守山市「つがやま市民教養文化講座」で「日本語の形成と近江文化」と題し講演したことが含まれる。滋賀の事例が混じっているのはそのためである。当日，司会をされた高谷好一京都大学名誉教授にもお礼を申しあげたい。

文　　献

青柳智之
1999 「琵琶湖の風の民俗」『ビワコダス・湖国の風を探る』（琵琶湖博物館研究調査報告 14）pp. 239–258。
Bellwood, P.
1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian archipelago*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
Blust, R.
1976 Austronesian culture history: some linguistic inferences and their relations to the archaeological record. *World Archaeology* 8(1): 19–43.
1980–1989 Austronesian etymologies. *Oceanic Linguistics* 19 (1-2): 1–181, 22–23 (1-2): 29–149, 25 (1-2): 1–123, 28 (2): 111–180.
Dahl, O. C.
1976 *Proto-Austronesian*. Lund: Studentlitteratur.
Dempwolff, O.
1938 Austronesisches Wörterverzeichnis. Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes III. *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen* 19.
福田良輔
1957 「原始日本語と文法」『日本文法講座 3 文法史』pp. 24–47，東京：明治書院。
濱田　敦
1946 『古代日本語』京都：大八州出版。
橋本進吉
1949a「「さふらふ」か「さうらう」か」『文字及び假名遣の研究（橋本進吉博士著作集 3）』pp. 111–122，東京：岩波書店。

1949b「古代國語の「え」の假名について」『文字及び假名遣の研究（橋本進吉博士著作集 3)』pp. 192–225，東京：岩波書店。
1950a「波行子音の變遷について」『國語音韻の研究（橋本進吉博士著作集 4)』pp. 29–45，東京：岩波書店。
1950b「國語音節の變遷」『國語音韻の研究（橋本進吉博士著作集 4)』pp. 51–103，東京：岩波書店。
1950c「古代國語の音韻に就いて」『國語音韻の研究（橋本進吉博士著作集 4)』pp. 105–199，東京：岩波書店。
1950d「國語の音節構造と母音の特性」『國語音韻の研究（橋本進吉博士著作集 4)』pp. 201–228，東京：岩波書店。

日野資成
2003 「日本祖語の母音体系──上代東国方言資料による再構」A. ボビン・長田俊樹共編『日本語系統論の現在（日文研叢書 31)』pp. 187–206。

伊波普猷
1975 「琉球聖典おもろさうし選釋──オモロに現はれたる古琉球の文化」『伊波普猷全集 6』pp. 1–207，東京：平凡社。

池上二良
1985 「ツングース語学入門」日本語の系統を考える会編『日本語の系統・基本論文集 1』pp. 82–122，大阪：和泉書院。
2000 「ツングース諸語」『言語学大事典 2 世界言語編（中)』pp. 1058–1083，東京：三省堂。

Itabashi, Y.
2011 An examination of a possible correlation between the tone distinction of the word-initial mora of Old Japanese words and the voicing distinction of the word-initial consonant of the putative matching Austronesian words. *Language and Linguistics in Oceania* 3: 1–22.

Izawa, T., A. Shomura, K. Ebana, T. Ebitani, H. Kanegae, S. Konishi and M. Yano
2008 Deletion in a gene associated with grain size increased yields during rice domestication. *Nature Genetics* 40: 1023–1028.

楠原祐介・桜井澄夫・柴田利雄・溝手理太郎編著
1981 『古代地名語源辞典』東京：東京堂出版。

小山修三
1996 『縄文学への道』東京：日本放送出版協会。

李壬癸（Li, Paul J. K.）
1972 On comparative Tsou. *Working Papers in Linguistics* 4(8):19–46.

Madulid, D. A.
2001 *A dictionary of Philippine plant names*. 2 vols. Makati: The Bookmark, Inc.

望月郁子編
1974 『類聚名義抄四種声点付和訓集成』東京：笹間書院。

村山七郎
1973 「シンポジウム・南島の古代文化」国分直一・佐々木高明編『南島の古代文化の探究・隼人』東京：毎日新聞社。
1974a『日本語の語源』東京：弘文堂。
1974b『日本語の研究方法』東京：弘文堂。
1975 『国語学の限界』東京：弘文堂。
1978 『日本語系統の探究』東京：大修館書店。
1988 『日本語の起源と語源』東京：三一書房。
1995 『日本語の比較研究』東京：三一書房。

村山七郎・大林太良
1973 『日本語の起源』東京：弘文堂。

室山敏昭
2001 『アユノカゼの文化史──出雲王権と海人文化』島根：ワン・ライン。

長野泰彦
1982 「色彩分類」合田濤編『認識人類学』pp. 107–136，東京：至文堂。

大野　晋
1953 『上代假名遣の研究』東京：岩波書店。

Ray, S. H.
1926 *A comparative study of the Melanesian island language*. Cambridge: Cambridge University Press.
崎山　理
1990 「古代日本語におけるオーストロネシア語族の要素」崎山理編『日本語の形成』pp. 99–122，東京：三省堂。
1993 「日本語の系統とオーストロネシア語起源の地名」埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』pp. 73–86，東京：朝倉書店。
1999 「日本語の起源」佐原真・田中琢編『古代史の論点 6 日本人の起源と地域性』pp. 179–196，東京：小学館。
2001 「オーストロネシア語族と日本語の系統関係」『国立民族学博物館研究報告』25(4): 465–485。
2008 「古代日本語におけるオーストロネシア系言語由来の植物名称──村山七郎先生の研究を振り返りつつ」池田哲郎編『日本語の探求──限りなきことばの知恵』pp. 193–198，京都：北斗書房。
2010 「日本語の形成過程と言語接触」『日本語学』臨時増刊号 11: 18–31。
関口　武
1985 『風の事典』東京：原書房。
島田一郎
2000 『桐生市地名考』群馬：桐生市立図書館。
Snow, B. E., R. Shutler, Jr., D. E. Nelson, J. S. Vogel and J. R. Southon
1986 Evidence of early rice cultivation in the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 14: 3–11.
鈴木孝夫
1962 「音韻交替と意義分化の関係について──所謂清濁音の対立を中心として」『言語研究』42: 23–30。
高谷好一
1990 『コメをどう捉えるのか』東京：日本放送出版協会。
Tsuchida, S.
1976 Reconstruction of Proto-Tsouic phonology. *Monograh Series* 5. Tokyo: ILCAA.
1977 Some plant names in Formosan languages. In M. Hashimoto (ed.) *Computational Analyses of Asian and African Languages* 7: 79–119. Tokyo: ILCAA.
Vovin, A.
1994 Is Japanese related to Austronesian? *Oceanic Linguistics* 33(2): 369–390.
渡部忠世
1993 『稲の大道──「稲の道」からみる日本の文化』東京：小学館。
Wurm S. A. and B. Wilson
1975 *English finderlist of reconstructions in Austronesian languages* (Pacific Linguistics C-33). Canberra: The Australian National University.
柳田国男
1978 『海上の道』東京：岩波書店。
安田尚道
2009 「古典語の数詞と助数詞」『日本語学』28(7): 4–11。
吉田金彦
2003 『京都の地名を歩く』京都：京都新聞出版センター。
吉崎昌一
1997 「縄文時代におけるヒエ問題」『文部省科学研究費重点領域研究・日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』ニュウズ・レター 2: 1–4。